

仙台市文化財調査報告書第110集

宮城県仙台市

郡山遺跡 VIII

—昭和62年度発掘調査概報—



1988.3

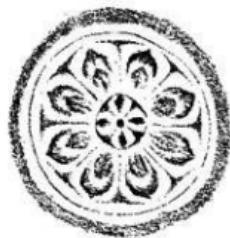
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第110集

宮城県仙台市

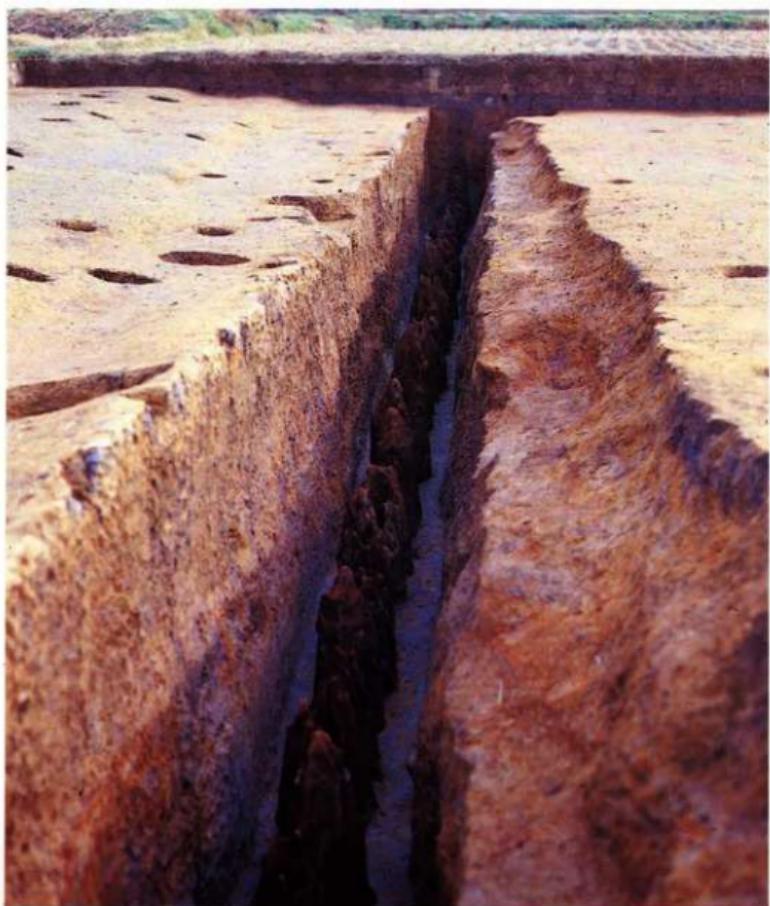
郡山遺跡 VIII

— 昭和62年度発掘調査概報 —



1988. 3

仙 台 市 教 育 委 員 会



Ⅱ期宮衛外郭南辺材木列

序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度で8年目を迎え、毎年次々と成果を積み、東北の古代史解明に一石を投じておりますことは、古代史・考古学等の議者のみならず市民の皆様方にも御承知のことと存じます。

郡山遺跡も「幻の城櫓」として1,300年の眠りから醒め、これまでの発掘調査によっていよいよ謎のペールがはがされ、古代の闇の中から少しずつ浮かび上がってきておりますことは、古代東北にかけるロマンをかきたてるものがあります。この様にこれまでの古代東北史の通説をくつがえした調査の成果は、日本の考古学界のみならず、古代史学界全体に大きな反響をも巻きおこしているところであります。

今年度は官衙に付属して造営された寺院の区画がより明らかとなり、多賀城の付属寺院である多賀廃寺と極めて似かよった様相を呈していることもわかつてくるなど多くの成果を上げ、ここに調査の記録を余す所なく報告・公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、調査を続行できることは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多大な御協力と御支援の賜と感謝申し上げるだいであります。

祖先の残してくれた貴重な文化遺産を護り、育み、次へ継承していく地道な作業は、ひとり行政担当の主導によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の、先人への深いご理解と子孫への広い展望を持つことによって、初めて成し遂げられるものであります。

これからも長期展望にたった文化財保護への深い御理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神の高揚の一助となりますことを御祈念申し上げご挨拶といたします。

昭和63年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は郡山遺跡の昭和62年度範囲確認調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業である。
3. 本概要是調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　木村浩二　I、II、III、IV、V、IX、X

及川　格　VI

千葉　仁　VII、VIII

遺構トレース　宮崎　明、樋口　敦、小林康子、古賀克典

遺物実測　木村、及川、千葉、前田裕志、下山田俊之

遺物トレース　千葉、及川、樋口

遺構写真撮影　木村、及川、千葉、宮崎、前田、小林

遺物写真撮影　千葉

遺物拓影　赤井沢進、赤井沢千代子

遺物補修復元　赤井沢(進)、赤井沢(千)

編集は調査員全員がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点 ($X = 0$, $Y = 0$) とし、高さは標高値で記した。

5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列跡・材木列　S E 井 戸 路　S X その他の遺構

S B 建 物 路　S I 整穴住居路・整穴遺構　P ピット・小柱穴

S D 溝 路　S K 土 坑

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A 繩 文 土 器　D 土師器(ロクロ使用)　G 平 瓦・軒平瓦

B 弥 生 土 器　E 須 惠 器　H その他の瓦

C 土師器(ロクロ不使用)　F 丸 瓦・軒丸瓦　N 金 属 製 品

8. 遺物実測図の中心線は個体の残存率がほぼ50%以上で実線、ほぼ25~50%で一点鎖線、これ以下は破線とし、網スクリーントーン貼り込みは黒色処理を示している。

9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐藤:1970)を使用した。

目 次

| | |
|---------------|----|
| 序 文 | |
| 例 言 | |
| Iはじめに | 1 |
| II調査計画と実績 | 3 |
| III第68次発掘調査 | 7 |
| IV第69次発掘調査 | 17 |
| V第70次発掘調査 | 20 |
| 1. 調査経過 | 20 |
| 2. 発見遺構 | 27 |
| 3. 出土遺物 | 41 |
| 4. まとめ | 42 |
| VI第71次発掘調査 | 47 |
| VII第72次発掘調査 | 53 |
| VIII第74次発掘調査 | 56 |
| IX総括 | 61 |
| X調査成果の普及と関連活動 | 71 |
| 写真図版 | 73 |

I はじめに

昭和62年度は郡山遺跡範囲確認調査第2次5ヶ年計画の3年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 早坂春一

管理係 係長 成出時雄

主任 岩澤克輔

主事 白幡靖子、山口 宏

調査係 係長 佐藤 隆

主事 木村浩二、及川 格、宮崎 明、大江美智代

教諭 千葉 仁

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北工業大学教授 建築史）

副委員長 工藤雅樹（宮城学院女子大学教授 考古学）

委員 岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授 考古学）

桑原滋郎（宮城県多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長 考古学）

須藤 隆（東北大学文学部助教授 考古学）

今泉隆雄（東北大学文学部助教授 歴史学）

発掘調査に際して、下記の方々諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

宮城県教育庁文化財保護課 進藤秋輝、加藤道男

宮城県多賀城跡調査研究所 白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、丹羽 茂、後藤秀一

文化庁記念物課 主任調査官 河原純之

国立歴史民俗博物館 助教授 平川 南

助教授 阿部義平

東北歴史資料館 小井川和夫

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々の御協力をいただいた。記して感謝したい。

地権者

赤井沢久治、庄子善重、斎藤芳雄、吉野秀夫、赤井沢政一

調査参加者

相沢義徳、赤井沢きすい、赤井沢サダ子、赤井沢進、赤井沢千代子、浅野やし子、阿部喜美安斉直子、伊藤克則、伊藤隆行、大内健一、大友鶴雄、小畠勝子、工藤ゑなよ、古賀克典、小林てる、小林康子、紺野好章、今野富美子、下山田俊之、鈴木かつ子、鈴木進、武田芳子田中さと子、寺田ユウ子、中村晶子、針生ゑなよ、半沢俊昭、樋口敦、前田裕志、八木啓介谷津和広、和田道治

整理参加者

赤井沢進、赤井沢千代子、大内健一、古賀克典、小林康子、下山田俊之、鈴木進、樋口敦、前田裕志

II 調査計画と実績

昭和62年度の発掘調査は、昭和60年度より始められた「郡山遺跡範囲確認調査」第2次5ヶ年計画案にもとづく第2年次として実施した。発掘調査については国庫補助金額の内示（総経費1,800万円、国庫補助金額900万円、県費補助金額450万円）を得たことから、次のような実施計画（案）を立案した。

表1 発掘調査計画表

| 調査次数 | 調査地区 | 調査予定期間 | 調査予定期間 |
|------|-----------|---------------------|--------|
| 第68次 | Ⅱ期宮衙中央北地区 | 100m ² | 5月 |
| 第69次 | Ⅱ期宮衙中央東地区 | 100m ² | 6月 |
| 第70次 | Ⅱ期宮衙外郭東辺 | 150m ² | 6月～7月 |
| 第71次 | 庵寺南西地区 | 1,335m ² | 7月～11月 |
| 計 | 4地区 | 1,685m ² | 5月～11月 |

発掘調査開始後、第69次以降の調査の開始時期を変更したり、新たに調査を行なう必要が生じ、最終時には第74次までの発掘調査を実施した。そのうち、第73次調査は本遺跡の東側に隣接する北目城跡（仙台市遺跡番号C-505）に関するものであるが、広義の郡山遺跡内であり古代の遺構の存在も充分想定されたことから、本遺跡の調査体制で対応した。

第68次調査区は方四町Ⅱ期宮衙の中央北地区にあたり、昨年度実施した第61次調査区と昭和58年度に実施した第35次調査区の間に位置している。この地区で住宅建築に伴う発掘層が提出されたことから、緊急調査を実施した。深さ40cm程の盛土の下層に旧畠地の耕作土を確認し厚さ80cm程の耕作土下層で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・一本柱列・溝跡等を検出した。竪穴住居跡や掘立柱建物跡はⅠ期宮衙段階、一本柱列はⅡ期宮衙段階のものであり、一本柱列は隣接する調査区で延長部分が検出されているが、他の遺構は調査区の中では全容を知り得なかった。また、Ⅰ期宮衙段階より先行する溝跡も1条検出した。

第69次調査区は方四町Ⅱ期宮衙の外郭東辺にあたり、外郭南東コーナーより北に160m程の地点に位置している。この地区で住宅建築に伴う発掘層が提出されたことから、緊急調査を実施した。現状はすでに宅地区割が終了し、道路敷用地等も確保されていたことから、当初予定していた面積の調査が行なえなかった。造成以前は畠地となっており、地表下80cm程の深さまで、耕作による擾乱をうけており、この耕作土下面で遺構を検出した。調査の結果、推定位置で外郭東辺材木列を検出したが、木材は遺存していないかった。

第70次調査区は推定方四町寺域内の南西地区にあたり、推定講堂跡の南西に位置している。また、昨年度調査を行った第66次調査区の西側に隣接し、同年の第62次調査で発見した寺院中

柵を聞くと推定される材木塀の南延長線上にもあたっている。現状は畠地となっており、表面調査では遺物は殆んど散布していなかった。今次調査は寺院中枢を区画する施設の確認と寺域内における造構の確認を目的として行なわれた。調査の結果、東側の一部は深耕がなされず深さ40cm程で遺構が検出されたものの、大部分は天地返し深耕のため80~120cmまで擾乱され、遺構の遺存状況は極めて悪い。寺院中枢区画の材木塀や寺院と同時期と考えられる竪穴住居跡や寺院の造営より先行するⅠ期官衙段階の建物跡・溝跡を発見した。その後、西側に調査区を拡張し、方四町推定西辺付近までの遺構確認を行ったが、深耕擾乱が著しく、寺院や官衙を構成した造構は発見されなかった。

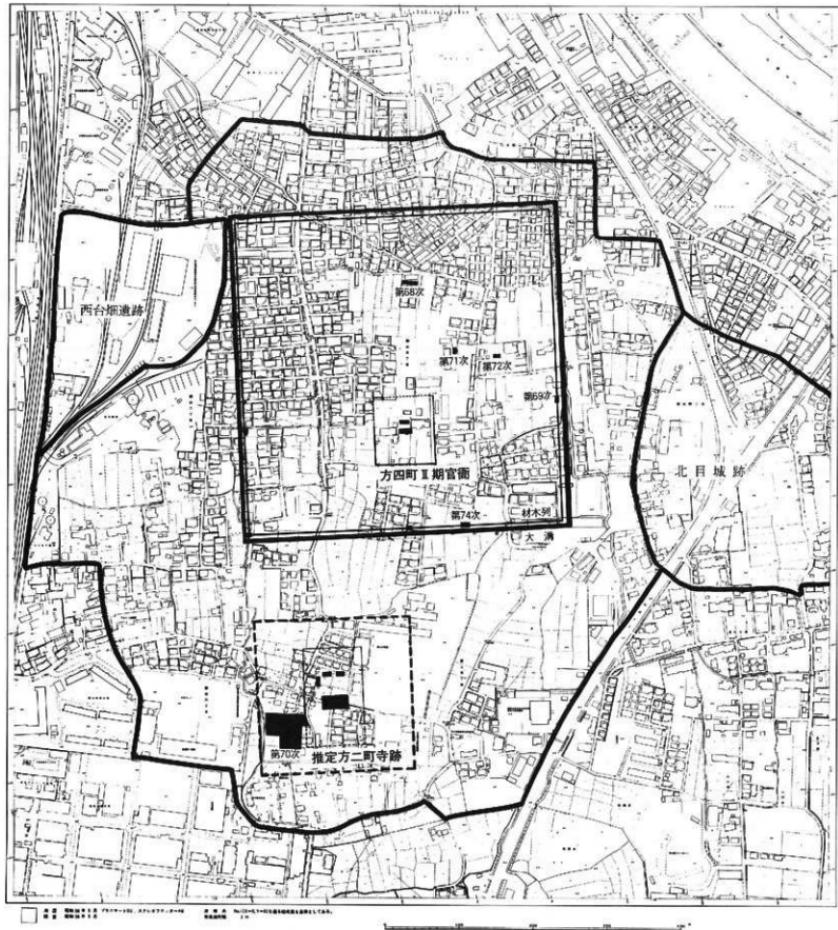
第71次調査区は方四町Ⅱ期官衙の中央地区にあたり、昭和55年度に第2次調査を実施した個所である。この地区で住宅建築計画がおこったことから、造成前に緊急調査を実施した。調査区は第2次調査の東側に隣接して設定した。現状は畠地である。調査の結果、耕作による深耕擾乱が著しく、深さ85cm程の黄褐色地山上面で、建物跡・溝跡を発見した。建物跡はⅠ期官衙段階と考えられ、第2次調査で発見の建物の東端部分とさらに縦柱による倉庫建物跡の2棟である。

第72次調査区は方四町Ⅱ期官衙東地区にあたり、この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。現状は宅地となっていたが、最近まで畠地として利用されていた。調査の結果、地表面より90cm程の深さまで耕作により擾乱され、地山上面で、竪穴住居跡・建物跡等の一部を発見した。

第74次調査区は方四町Ⅱ期官衙外郭南辺にあたり、外郭南東コーナーより西に140m程の地点に位置している。この地点は外郭一辺総長の3分割点にあたり、西辺においてはこの3分割点位置に槽状建物跡が確認されていたことから、南辺における同位置での遺構を確認することを目的として調査が行われた。現状は水田である。調査の結果、外郭材木列が良好に遺存しており、ほぼ想定位置で外郭材木列に付設されたと考えられる構造物を1棟発見した。

表2 発掘調査実績表

| 調査次数 | 調査地区 | 調査面積 | 調査期間 |
|------|-----------|---------------------|---------------|
| 第68次 | Ⅱ期官衙中央北地区 | 80m ² | 5月6日~5月27日 |
| 第69次 | Ⅱ期官衙外郭東辺 | 50m ² | 5月27日~6月4日 |
| 第70次 | 廃寺南西地区 | 2,018m ² | 6月2日~12月10日 |
| 第71次 | Ⅱ期中央地区 | 60m ² | 9月1日~10月16日 |
| 第72次 | Ⅱ期官衙中央東地区 | 45m ² | 10月5日~10月16日 |
| 第74次 | Ⅱ期官衙外郭南辺 | 170m ² | 11月10日~12月10日 |
| 合計 | 6地区 | 2,423m ² | 5月6日~12月10日 |



第1図 遺跡現況平面図

II 第68次発掘調査

1. 調査経過

第68次調査は、仙台市郡山三丁目24-1菅野秀夫・今朝次郎氏より、郡山三丁目117-1、117-4において、集合住宅新築のため、昭和62年4月2日付で発掘届が提出され、5月6日より敷地内の発掘調査を実施した。

調査地区は、方四町Ⅱ期官街の中央北寄りの地区で、外郭南辺より北3町線上にあたり、第61次調査区と第35次調査区の間に位置している。この地区一帯では第24・35・61次調査により、Ⅱ期官街の一本柱列による跡跡や建物跡・井戸跡の他、Ⅰ期官街の倉庫建物群や官街雜舎建物群およびそれらを開む跡跡など多くの遺構が集中的に発見されている地区である。Ⅰ期官街雜舎ブロックはこれまでの調査により東西51~54m(170~180尺)、南北長65~66m(216~220尺)の規模であることがわかつており、今回の調査対象地区もこのブロック内に含まれる他、Ⅱ期官街の一本柱列の想定線上にも位置している。

5月6日から調査を開始したが、建物配置や排土場などの関係から、敷地内の北側に東西19.5m×南北4mの調査区を設定した。現状は宅地となっていたが、旧状は畠地で、40cm程の盛土を行って宅地化したものとみられたため、重機によって表土・耕作土の排土を行った。盛土下層に旧耕作土が認められたが、これも天地返し深耕により深くまで擾乱が及んでいた。遺構は黄褐色地山の上面で検出されたが、上層の浅い遺構は殆んど耕作擾乱により消滅したものとみられ、豊穴住居跡などは床面がかろうじて遺存している状態であった。検出した遺構は当初想定したⅡ期官街の一本柱列や、Ⅰ期官街造営以前の溝跡などの他、Ⅰ期官街の掘立柱建物跡や豊穴住居跡など多くの遺構が発見された。調査区が極めて狭く、各遺構の全容が明らかでないことや、遺構の遺存状況が良くないこと、出土遺物が少ないとどから、詳細な検討が行なえなかつたが、これまでの隣接区の調査成果を裏づける資料を得ることができた。5月27日、全ての調査を終了し、27日埋め戻し作業を行つた。



第2図 第68次調査区位置図

2. 発見遺構

今回の調査によって発見された遺構は一本柱列1列、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡4軒、溝跡1条、土坑2基、柱穴・ピット12などである。宮術造営以前の溝跡が1条の他は、Ⅰ期宮術の遺構が大半を占め、Ⅱ期宮術の遺構は東西にのびる一本柱列だけである。すべての遺構は耕作土下の第Ⅲ層上面で検出している。しかし、本来の掘り込み面はこれよりも上位であったと思われ、上層が後世の耕作によって擾乱されたため第Ⅲ層上面が検出面となったものである。

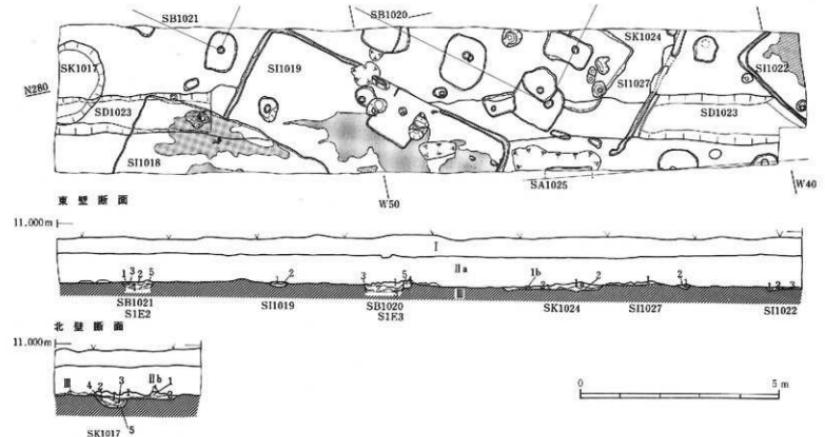
S A 1025一本柱列 東西方向に延びる一本柱列で、方向はW-0°-Eである。検出した柱穴は3つで、2間分のみであるが、更に東西に続いている。柱間寸法は235cmである。柱穴は一辺70~110cmの不整方形・不整円形を呈し、柱痕跡は直径16~19cmである。柱穴内より土師器壊・甕片・須恵器甕片が出土している。S A 386一本柱列（第35次）、S A 794一本柱列（第61次）と同一遺構である。

S B 1020建物跡 東西2間以上（柱間寸法240cm）、総長4m以上、南北1間以上（柱間寸法150cm）で、東西棟建物と考えられる。柱列方向はE-33°-Sである。柱穴は一辺70×120cm 110×130cmの不整方形を呈し、柱痕跡は直径15~22cmである。柱穴埋土は黄褐色・明黄褐色粘土質シルトである。S D1023、S K1024を切っている。柱穴内より土師器壊・甕片・須恵器甕片が出土している。

S B 1021建物跡 東西1間分の柱穴2つを検出したのみで、建物の南東コーナー部分と考えられる。柱列方向はE-30°前後-Sである。柱穴は75×100cm程の不整方形で、柱痕跡は直径17cmである。柱穴埋土はにぶい黄褐色・黒褐色粘土質シルトである。

S I 1018竪穴住居跡 北辺長4.9m以上、西辺長2.1m以上で、東・南辺は調査区外のため全容は不明である。西辺方向はN-30°-Eである。上部削平が著しく、床面まで擾乱が及んでおり、貼床も一部しか残存していない。カマドは北壁につけられており、北西コーナーより1.5m程に中心を置いている。掘り方は10~14cmで、埋土は黄褐色砂質シルトである。北壁際床面上より土師器壊一個体が出土している。S I 1019、S D1023を切っている。

S I 1019竪穴住居跡 北辺長6.9m、西辺長4.3m以上で、南側は調査区外のため全容は不明である。北辺方向はE-31°-Sである。上部削平が著しく、床面まで擾乱が及んでおり、貼床も一部しか残存していない。カマドは北壁につけられており、中央より50cm程東寄りに中心を置いている。焚口部から燃焼部にかけて奥行130cm、幅110cmでほぼ方形に深さ10cm程掘り下げられている。また、カマド両脇には北壁から55~75cm離れて右に2つ、左に1つ、40×60cm程の不整形ピットがある。壁際には軸10cm前後、深さ5~10cmの周溝がめぐる。床面上から土師器壊・甕片・円面鏡、須恵器瓶の他、カマド左脇ピットから土師器甕1個体分が出土している。S D1023を切っており、S I 1018に切られている。



土色 誌記

| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|--------------|---------------------|---------------------------|----------------------------|
| 層本層号 | | | |
| I | 2.5YR 黄 細 | 砂質シルト (粘土) | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトをまだらに含む |
| II | 10YR5y 暗 青 色 シルト | (天地端) | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトをブロック状に含む |
| III | 10YR5y 暗 青 色 シルト | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトをブロック状に含む | 10YR5y 暗青褐色 シルトを含む |
| IV | 10YR5y に近い黄褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄とマンガンを含む |
| SB1020 S1013 | | | |
| 1 | 10YR5y 黄 細 | 粘土質シルト | 10YR5y に近い黄褐色粘土質シルトをまだらに含む |
| 2 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| 3 | 10YR5y 黄 細 | 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む |
| 4 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| 5 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | マンガンを含む |
| SB1020 S1022 | | | |
| 1 | 10YR5y 黄 細 | 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| 2 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| SK1017 | | | |
| 1 | 10YR5y 暗 黄 色 シルト | 10YR5y 黄褐色シルトを含む | 10YR5y 黄褐色シルトを含む |
| 2 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| 3 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| 4 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| 5 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトを含む |
| SI1018 | | | |
| 1 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む |
| 2 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む | 10YR5y 黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む |

| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|--------|---------------------|---------------------|---------------------------|
| SI1022 | | | |
| 1 | 10YR5y 黑 細 | 粘土質シルト | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトをブロック状に含む |
| 2 | 10YR5y に近い黃褐色 | 粘土質シルト | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む |
| 3 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y に近い黃褐色粘土質シルトを含む |
| SI1027 | | | |
| 1 | 10YR5y 暗 黄 色 シルト | 10YR5y 黃褐色シルトを含む | 10YR5y 黃褐色シルトを含む |
| 2 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む |
| SK1024 | | | |
| 1 | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む |
| 1 b | 10YR5y 暗 黄 色 粘土質シルト | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む | 10YR5y 黃褐色粘土質シルトを含む |
| 2 | 10YR5y 暗 黄 色 シルト | 10YR5y 黃褐色シルトを含む | 10YR5y 黃褐色シルトを含む |

第3図 第68次調査区平・断面図

S I 1022竪穴住居跡 北西コーナーの1部を検出したのみで、全容は不明である。北辺長1m以上、方向はE-37°-N、西辺長2.4m以上、方向はS-42°-Eとやや歪んでいる。上部擾乱が著しく、貼床は一部のみ残存している。壁際には幅7~10cm、深さ8~10cmの周溝がある。掘り方は深さ5cm前後で、埋土はにぶい黄褐色・灰黄褐色粘土質シルトである。SD 1023を切っている。

S I 1027竪穴住居跡 東壁際から南東コーナー一部の周溝と柱穴2つが検出されたのみで、北側は調査区外のため全容は不明である。上部削平が著しく、床面も削平されている。周溝は幅12~15cm、深さ10cm以上である。東辺長は3.6m以上で、方向はN-33°-Eである。柱穴は直徑35~50cmの不整円形で、柱痕跡は直徑12~13cm、深さ45~60cm以上、心々間隔は260cm、南東柱穴から東壁まで125cmである。SD 1023を切っており、SB 1020、SK 1024に切られている。

SD 1023溝跡 総長19m以上で東西に延びる。上幅90~130cm、下幅50~80cm、深さ45cm以上、底面は平坦で高低差は殆どない。断面形は逆台形で、壁は直線的に立ちあがる。方向はE-5°-Sであるが、わずかに蛇行している。堆積土はにぶい黄褐色・にぶい黄橙色砂質シルトで、底面に10cm程に灰黄褐色砂質シルトが堆積している。全ての遺構に切られている。

SK 1017土坑 東半部のみで、西側は調査区外のため、全容は不明である。南北2.1m、東西1.1m以上の不整円形で、深さ17cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は灰黄褐色・にぶい黄褐色シルトである。堆積土中より土師器壺片が出土している。SD 1023を切っている。

SK 1024土坑 東西3.1m以上、南北2.2m程の不整形形を呈すが、西側は上部削平のため全容は不明である。深さ20cm程で、底面は凹凸あり、壁は直立気味に立ちあがる。堆積土は褐色・暗褐色の砂質・粘土質シルトである。SB 1020建物跡に切られている。

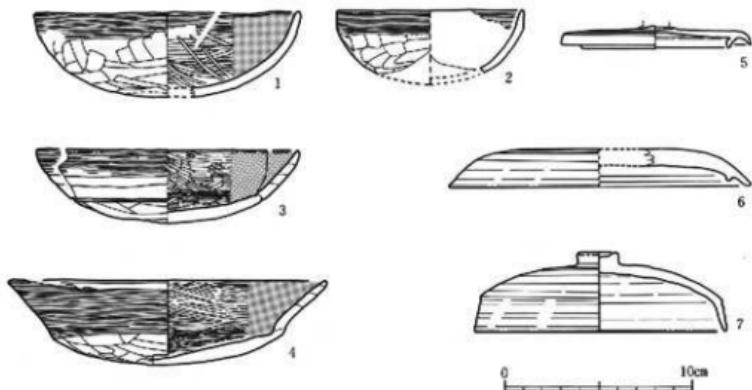
3. 出 土 遺 物

第68次調査による出土遺物は土師器、須恵器、円面碗、陶器片、小玉石などである。遺物出土量は少なく、破片資料が大部分である。以下、遺構ごとに略述する。

SA 1025-1本柱列 土師器壺・壺片、須恵器壺片が出土している。

SB 1020建物跡 掘り方埋土より土師器壺・壺片が出土している。

S I 1018竪穴住居跡 堆積土内より土師器C-630壺（第4図4）、壺片、須恵器E-291蓋（第4図7）が出土している。C-630壺は内面黒色処理・ヘラミガキ調整の壺で、丸底から段上部が外反する。E-291蓋は有蓋高壺の蓋とみられ、扁平で中央凹みのツマミを付けている。



| 番号 | 登錄番号 | 種別 | 形態 | 生土遺構 | 層位 | 外観調査 | | 内観調査 | | 法面 | | 時代 | 組合 | 古文 | |
|-----|-------|-----|----|----------|----|-------|-------|-------|-------|-------|-----|------|------|------|------|
| | | | | | | 口部 | 側部 | 底部 | DHE部 | 伴生 | 底部 | 高さ | 口径 | 底径 | |
| 4-1 | C-533 | 土師器 | 环 | S I 1019 | | ココナツ | ハラカズリ | ハラカズリ | ヘラミガキ | 黒色絞り | 4.5 | 14.5 | 不規 | 6 | 60-9 |
| 4-2 | C-626 | 土師器 | 环 | 耕作土 | | ココナツ | ハラカズリ | ココナツ | ハラカズリ | | 3.3 | 10.0 | 6 | 関東系 | 40-3 |
| 4-3 | C-627 | 土師器 | 环 | 耕作土 | | ココナツ | ココナツ | ハラカズリ | ヘラミガキ | 黒色絞り | 3.9 | 14.0 | 9.7 | 6 | 60-1 |
| 4-4 | C-530 | 土師器 | 环 | S I 1028 | | ココナツ | ハラカズリ | ハラカズリ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 4.5 | 16.5 | 12.5 | 注記 | 40-2 |
| 4-5 | E-283 | 須恵器 | 蓋 | 耕作土 | | ハラカズリ | ハラカズリ | セロナナ | ロクロナナ | ロクロナナ | | 10.1 | 6 | | |
| 4-6 | E-284 | 須恵器 | 蓋 | 耕作土 | | ハラカズリ | ハラカズリ | セロナナ | ロクロナナ | ロクロナナ | 2.0 | 16.1 | 6 | | |
| 4-7 | E-201 | 須恵器 | 蓋 | S I 1048 | | ワタナベ | ハラカズリ | セロナナ | ロクロナナ | ロクロナナ | 4.2 | 13.4 | 注記 | 60-4 | |

第4図 第68次調査区出土遺物

S I 1019堅穴住居跡 堆積土内より土師器坏・甕片、円面甕E-285の他、床面上より須恵器E-286瓶、カマド両脇のピット内より土師器甕片が出土している。

S I 1022堅穴住居跡 周溝内より土師器甕片が出土している。

S I 1027堅穴住居跡 柱穴内より土師器甕片が出土している。

S K 1017土坑 堆積土中より土師器甕片が出土している。

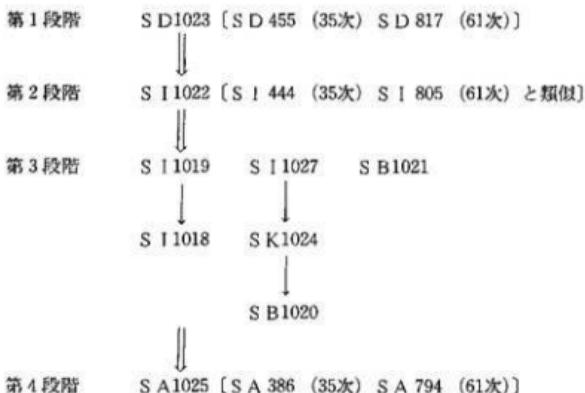
その他、耕作土中より土師器C-627环・628环（第4図3・2）、626环、須恵器E-282高坏・283蓋・284蓋（第4図5・6）、土師器坏・甕片、須恵器甕・甕片、陶器片が出土している。C-626环は内面に漆の付着がみられる。C-628环は赤褐色を呈し、内面ナデ調整の小形环で関東系环である。E-283・284蓋はいづれも内面にカエリをもつ蓋である。283は小形でカエリ部分が大きい。284は283にくらべ大形で、カエリ部分が極めて小さい。遺構検出面からは土師器C-629环の他、坏・甕片、須恵器片、小玉石などが出土している。C-629は小破片であるが、橙色薄手で内面に放射状暗文がみられる。

4. まとめ

調査区が極めて狭く、検出した遺構の全容を知り得るものがないことや、耕作による擾乱が

著しく、遺構の遺存状態が必ずしも良好とはいえないことから、本調査区内だけでの調査所見からは十分な検討をすることができないが、西側での第35次調査、東側での第61次調査等の調査成果とあわせて検討しておきたい。

発見遺構は重複関係や方向性などからみて、4つの段階に区分することができる。この段階区分はこれまでの区分の第1から第4段階に相当し（註1）、各段階の遺構の変遷は次のとおりで、第35・61次で発見された遺構と同一と考えられるものがあり、これについては遺構名を併記した。



〔第1段階〕 SD 1023溝跡

SD 445・SD 817と同一の遺構とみられるが、今次調査でも出土遺物が全くなく、年代の特定ができない。方向も地點により不揃いで、直線的に延びるものではなく、第4段階 SA 1025と交錯しながら蛇行している。

〔第2段階〕 SI 1022竪穴住居跡

今次調査の中では第3段階遺構群と直接の重複関係はないが、SI 805（第35次）と同一方向を示していることから、第2段階とみておきたい。上部削平のため床面まで消失し、出土遺物もないことから、年代検討ができない。

〔第3段階〕 SB 1020・1021建物跡、SI 1018・1019・1027竪穴住居跡、SK 1024土坑

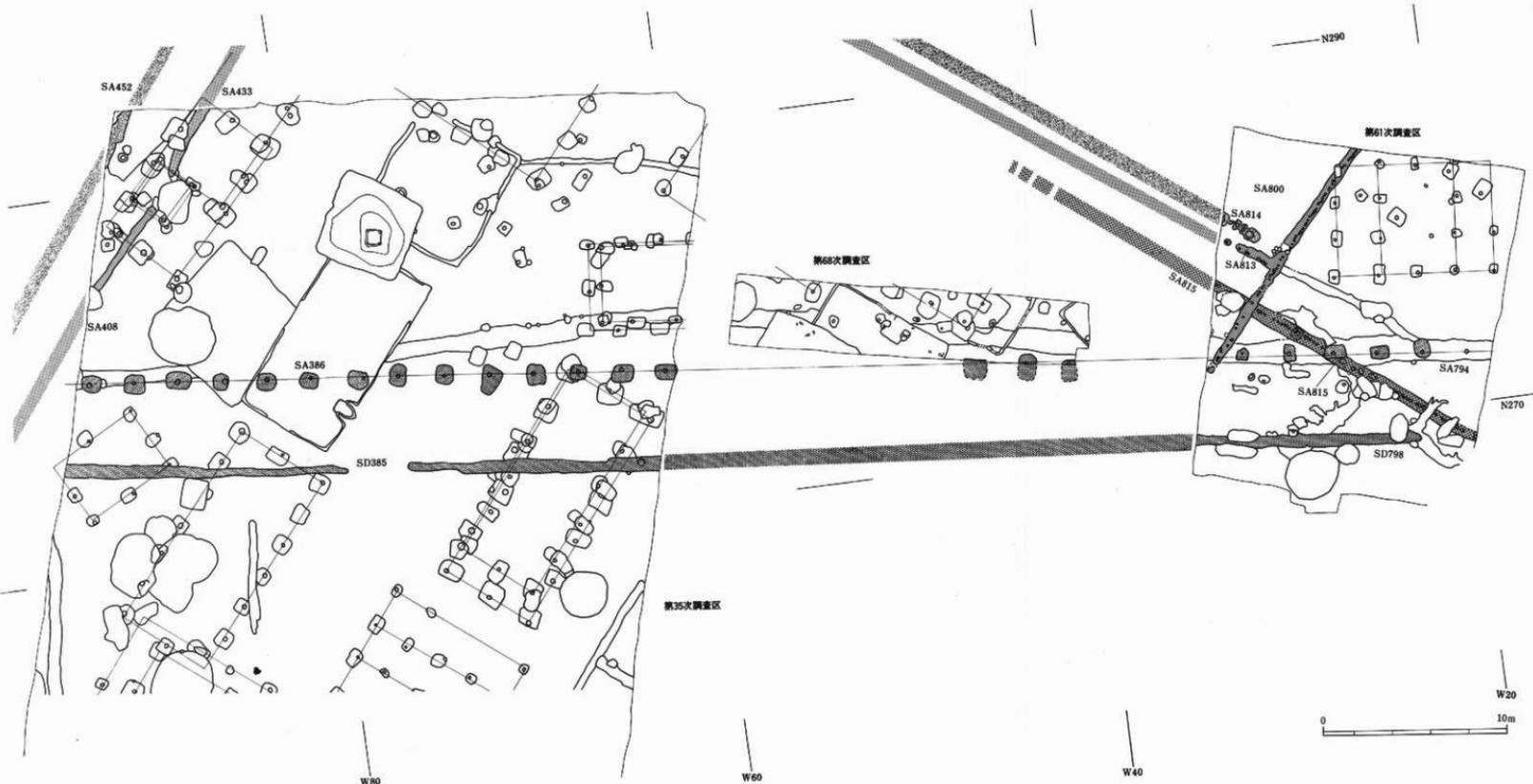
I期官衙段階

遺構の重複状況からみて3小期以上に細分されるが、各小期の変遷は不明である。本調査区は、これまでの調査結果から、材木層によって囲まれた東西51～54m（170～180尺）、南北65～66m（216～220尺）のI期官衙雑舎ブロックの中に含まれており、今回発見された遺物跡

や豎穴住居跡もⅠ期官衙雑舍群の1つとみておきたい。豎穴住居跡については全容が明らかでないことから検討できないが、長屋風プランとなる豎穴建物（註2）の可能性も考えられよう。各遺構からの出土遺物は極めて少ないが、S I 1018から出土した土師器C-630环は内面黒色処理ヘラミガキ調整の有段丸底で、段上部が外反する在地系の环である。この様な特徴は東北南半地域における土師器編年上、第V型式一栗圓式一（註3）とされ、栗圓式土師器はタイプサイトである栗遺跡の調査により多く土器が出土し、これを4期に分類している。各期の年代観については明らかにされていないが、「下限を7世紀末とした場合、上限は、7世紀の早い時期と考えられる。」としている（註4）。C-630环は栗遺跡4E b類に類似しており、4E bはⅡ期土器群の中に含まれている。Ⅲ期土器群の年代は明らかでないが、全体の年代幅と前後土器群との関係から7世紀中葉を中心とする年代観が考えられよう。また、併せて出土した須恵器E-291蓋は有蓋高环の蓋で、天井中央に扁平で中央に凹みを持つツマミが付けられている。口縁部は丸味を持つつくりで、天井部と口縁部の間にごくわずかだが段がみられ、全体としては扁平気味である。有蓋高环は陶邑古窯跡群の編年によればⅡ型式までであり、Ⅲ型式以降は全くみられず、年代的には7世紀前半代までと考えられる（註5）。両者の年代観に若干の時差があるが、この中には2つの検討すべき問題が含まれよう。1つは畿内における須恵器編年の年代観が、本地域のそれに適用されるか否か。2つは在地のこれまでの土師器編年の年代観で、本遺跡の土器群を理解し得るか否かである。この他にも本地域における須恵器生産および国外からの搬入の状況や、集落遺跡と官衙遺跡における土器組成の差異など多くの問題も含まれよう。ここではこれらの問題について1つ1つ検討する余地がないことから、第3段階の土器群に半世紀以上の年代幅が考えられるものとみておきたい。しかし、第3段階遺構群はⅠ期官衙を構成しており、地方官衙の成立を7世紀中葉以前には考えられないことから、S I 1018の発掘年代を7世紀後半の早い時期と考えておきたい。

[第4段階] S A 1025一本柱列 Ⅱ期官衙段階

本調査区内では柱穴を3つ（2間分）検出したのみであるが、第35次調査のS A 386、第61次調査のS A 794と同一遺構とみられる。第35・61次調査により、この一本柱列が72m以上にわたって続き、柱間寸法も細かな差異はあるもののほぼ8尺等間で続いている。



第5図 第68次調査区全体図

IV 第69次発掘調査

1. 調査経過

第69次調査は、仙台市郡山三丁目24—1 菅野秀夫・今朝次郎氏より、郡山三丁目2—2の一部において共同住宅新築のため、昭和62年1月20日付けで発掘届が提出され、5月27日より敷地内の発掘調査を実施した。調査地区は方四町Ⅱ期官街の外郭東辺にあたり、外郭南東コーナーより北に160m程に位置している。外郭東辺は第11・18次調査で確認されており、今次調査の対象となった地区内には外郭材木列の存在が推定された。建築計画では敷地内に2棟の集合住宅が建てられ、両棟とも外郭材木列推定線にかかっていたことから申請者菅野秀夫・今朝次郎氏と協議の結果、計画建物位置を移動し、外郭材木列にかかるないように設計変更することで諒解を得られた。現状はすでに盛土・土地区別などの造成が終了し、宅地となっていたがつい最近まで畠地となっており、かなり深くまで深耕による擾乱が及んでいることが予想された。

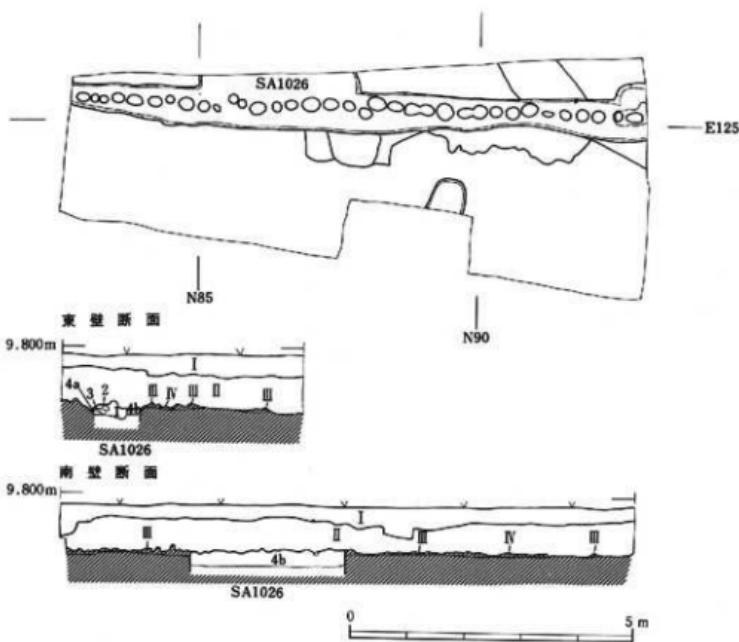
5月27日から調査を開始したが、排水場や敷地割の関係から、敷地内の北東側で材木列推定線にかかる部分を中心に東西5m×南北10mの矩形の調査区を設定した。盛土・耕作土の排水は重機によって行った。天地返しによる深耕は黄褐色砂質シルトの地山面まで及んでおり地山上面で造構検出作業を行った。調査の結果、ほぼ推定位置から材木列が検出された他は、上層擾乱が著しかったことや調査区が狭かったことから造構は検出されなかった。

また、住宅建築の付帯工事として、水道管理設工事並びにガス管理設工事が西側本管から敷地内までの延長150mにわたってほぼ同一ルートで計画され、各々発掘届が提出されたことから、極力造構および造構面の破壊を防ぐため、同一道路敷内にすでに埋設した管の掘り方内に重複して新管を埋設する旨指導し、掘削時に断面観察等の調査を並行して行った。

本調査は6月2日に終了し、4日埋め戻しを行った。水道管・ガス管の埋設に伴う調査は各々、5月18日から27日まで、8月27日から31日まで行った。



第6図 第69次調査区位置図



土色註記

| 層位 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----------|----------------|--------|----------------------------------|
| 基本層位 | | | |
| I | 10YR5/6 咸褐色 | シルト | (盛土) 10YR5/6灰褐色シルトをブロック状に含む |
| II | 10YR5/6 咸褐色 | シルト | (天地返し) 10YR5/6に赤い黄褐色シルトをブロック状に含む |
| III | 10YR5/6 黄褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄とマンガン斑を含む |
| IV | 10YR5/6 褐色 | 砂質シルト | 酸化鉄とマンガン斑を含む |
| SA1026 | | | |
| 1 | 10YR5/6 に赤い黄褐色 | シルト | (材料例) 10YR5/6に赤い黄褐色シルトを斑点状に含む |
| 2 | 10YR5/6 灰褐色 | シルト | 酸化鉄とマンガン斑を少量含む |
| 3 | 10YR5/6 灰褐色 | シルト | 10YR5/6に赤い黄褐色シルトをブロック状に含む |
| 4a | 10YR5/6 黄褐色 | 砂質シルト | 10YR5/6灰褐色シルトをブロック状に含む |
| 4b | 10YR5/6 に赤い黄褐色 | 砂質シルト | 酸化鉄とマンガン斑を多量に含む |

第7図 第69次調査区平・断面図

2. 発見遺構と出土遺物

今回の調査によって発見された遺構は材木列1列のみである。この材木列はⅡ期宮衙の外郭東辺を成すものである。

S A 1026材木列 上幅35~70cmの布掘り中央にはほぼ一直線に直径8~18cmの材木痕跡が密接してみられる。方向はN-0°-Sである。検出分の総長は10mであり、材木痕跡は35本である。更に南北に続いている。布掘りが一部で西側が広がっているが、さらに調整区外に延びており、不明である。掘り方埋土は灰黄褐色・褐色のシルト・砂質シルトである。埋土内から土師器坏・甕片・須恵器坏・甕片・陶器片が出土している。

耕作土中からは土師器坏・甕片・須恵器坏・甕片・陶器片が出土している。

3. まとめ

Ⅱ期宮衙外郭東辺にかかる調査はこれまで、第11次・第18次の2回実施しており、第11次調査では材木列と火溝を推定南東コーナーより北に47m程の位置で確認し、また、第18次調査では同じく127m程北の地点で材木列を確認した。これらの調査成果によれば、外郭東辺材木列は南辺材木列と直交して真北方向に造営されていることがわかつっていた。今次調査もこれまでの成果の推定位置で材木列を検出した。現況が畠地であったことから、材は遺存していなかったがこれまでの成果とほぼ同様の状況であることがわかつた。

V 第70次発掘調査

1. 調査経過

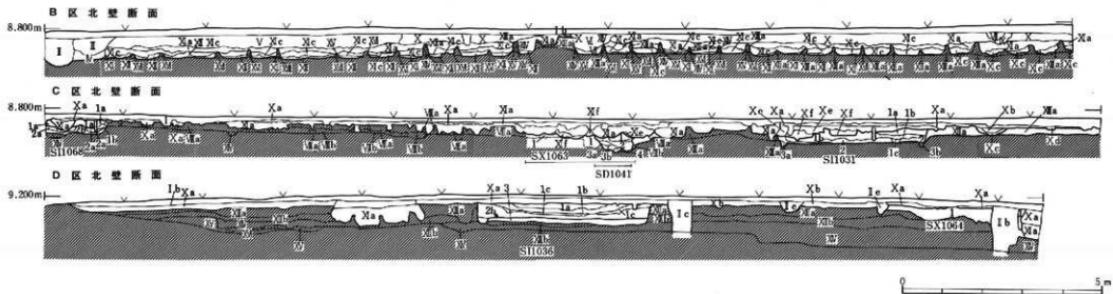
第70次調査区はⅡ期官術に並行して造営されたと考えられる推定方二町寺院跡の南西地区にあたり、講堂跡と考えられる版築基壇や、僧房跡と考えられる建物群が発見された第12・63次調査区の南西方に位置する。また、寺院中枢伽藍を囲むと考えられる材木列の推定西辺位置も調査対象区内に含まれている。今次調査はこの中枢区画施設とみられる材木列の遺構確認ならびに中枢伽藍周辺における関連諸施設の遺構確認を目的として計画したものであるが、推定方二町寺域内で広範囲な調査が可能な地区は本地區以外には北西部の水田地区だけである。現状は畠地となっているが、昭和20年代に行なわれた天地返し耕作により、遺構の擾乱・削平が著しいことが予想された。しかし、地権者庄子氏の言によれば、耕作の際にも殆んど瓦片・土



第8図 第70次調査区位置図

器片等の遺物が出土せず、講堂・僧房推定地の畠地とは際だった対照を示していることで表面調査でもこれを裏づける様に殆んど遺物が散布していない。現況地形は東側の寺院中枢から続く標高9m前後の自然堤防微高地となっており、調査対象地とした畠地の西端で1m程の段差がみられ、標高8m程の低位水田となり、段周線をめぐる様に蛇行しながら南北方向に続く水路がみられる。この水路はⅡ期官術外郭西辺から続いており、方二町寺域の推定西辺となっている。段下部の低位水田面は旧河道とみられ、表土下には河川堆積と考えられる砂礫層がある。

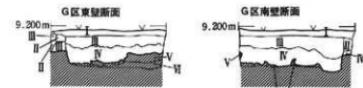
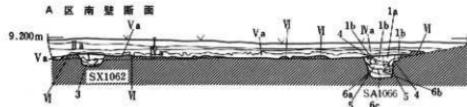
6月2日から調査を開始した。調査区は現状畠地割に従って、東端に短形に張り出した部分をA区として東西長は北で6m、南で10m、南北11mの変形調査区を設定し、その西側は東西25m程、南北15m程の長い畠が3枚南北に接しており、これを北からB・C・D区として設定した。A区は天地返し等の深い耕作を行っていないことから、全域を人力により掘り下げ、耕作土下20cm程で遺構検出作業を行った。B～D区は3地区とも天地返し深耕を行っており、19ヶ所に設けた1×1mのテストピット観察の結果、浅い部分では地表下30cm程で遺構検出面



土色註記

M-13

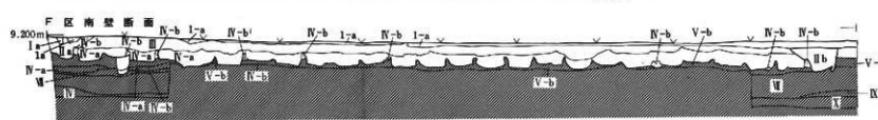
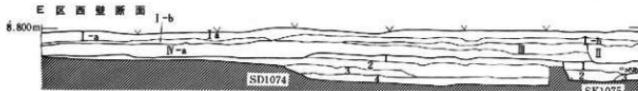
| | | | | |
|--------|---|--------|---------------|---|
| SX1001 | 1 | 10YR5s | 暗 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。 |
| | 2 | 10YR5s | 暗 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。炭酸カルシウムを少くプロック状に含む。 |
| | 3 | 10YR5s | 暗 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトをプロック状に含む。 |
| | 4 | 10YR5s | 暗 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。10YR5s/暗褐色シルトをプロック状に含む。 |
| | 5 | 10YR5s | 暗 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。 |
| SX1006 | 1 | 10YR5s | 深 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/において暗褐色シルトを少くプロック状に少量含む。 |
| | 2 | 10YR5s | 深 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/において暗褐色シルトを少く含有する。 |
| | 3 | 10YR5s | 深 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/において暗褐色シルトを少くプロック状に含む。 |
| | 4 | 10YR5s | 深 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/において暗褐色シルトを少くプロック状に含む。 |
| | 5 | 10YR5s | 深 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/において暗褐色シルトを少く含有する。 |
| SX1008 | 1 | 10YR5s | 褐 黑 色 シ ル ト | 10YR5s/に褐色色調をもつてシルトを多く含有する。 |
| | 2 | 10YR5s | 褐 黑 色 シ ル ト | 10YR5s/に褐色色調をもつてシルトを多く含有する。 |
| | 3 | 10YR5s | 褐 黑 色 シ ル ト | 10YR5s/に褐色色調をもつてシルトを多く含有する。 |
| | 4 | 10YR5s | 褐 黑 色 シ ル ト | 10YR5s/に褐色色調をもつてシルトを多く含有する。 |
| | 5 | 10YR5s | 褐 黑 色 シ ル ト | 10YR5s/に褐色色調をもつてシルトを多く含有する。 |
| SX1041 | 1 | 10YR5s | 深 暗 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。 |
| | 2 | 10YR5s | 深 暗 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。 |
| | 3 | 10YR5s | 深 暗 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。 |
| | 4 | 10YR5s | 深 暗 褐 色 シ ル ト | 10YR5s/暗褐色シルトを粒状に含む。 |
| SX1063 | 1 | 10YR5s | 褐 黑 色 シ ル ト | 10YR5s/において暗褐色シルトをプロック状に含み。炭化物を含む。 |
| SX1064 | | | | |



土色註記

| 層位 | 土色 | 土性 | 標示 |
|--------|-----------------|---------------------------|----|
| 1 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを多量含む | |
| B_a | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを極めて含む | |
| B_b | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを含む | |
| V_a | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを極めて含む | |
| V_b | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを含む | |
| SA1066 | | | |
| 1_a | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトをブロック状に含む | |
| 1_b | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトをブロック状に含む | |
| 2 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを極めて含む | |
| 3 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを含む | |
| 4 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトをブロック状に含む | |
| 5 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを極めて含む | |
| 6_a | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを少ブロック状に含む | |
| 6_b | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを少ブロック状に含む | |
| 7 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトをブロック状に含む | |
| SA1062 | | | |
| 1 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを極めて含む | |
| 2 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを含む | |
| 3 | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを極めて含む | |

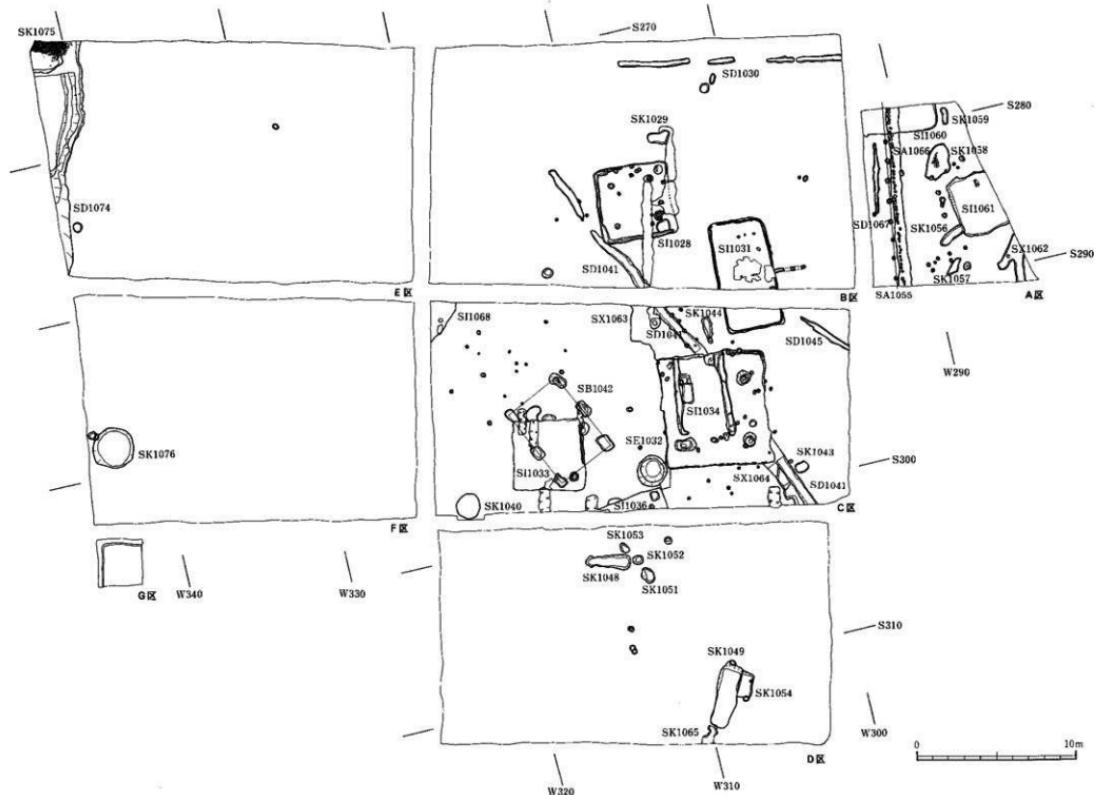
| 層位 | 土色 | 土性 | 標示 |
|----|-----------------|-----------------------|----|
| B | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを地盤に含む | |
| B | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを地盤に含む | |
| B | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを地盤に含む | |
| V | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを地盤に含む | |
| V | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを地盤に含む | |
| V | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを地盤に含む | |
| V | 10YR5% 細 色 シ ルト | 10YR5% 細 色 シ ルトを地盤に含む | |



| 層位 | 土色 | 土性 | 標示 |
|--------|---------------------|------------------------------------|----|
| SD1074 | | | |
| 1 | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを少ブロック状に含む | |
| 2 | 10YR5% に近い黒褐色 シ ルト | 10YR5% に近い黒褐色シルト、10YR5% 黑褐色のシルトを含む | |
| 3 | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを少ブロック状に含む | |
| 4 | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを含む | |
| SK1075 | | | |
| 1 | 10YR5% 黑 黃 褐 色 シ ルト | マンサン鉱を多く含む | |
| 2 | 10YR5% に近い黒褐色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを含む | |
| 3 | 10YR5% 黑 黃 褐 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを少ブロック状に含む | |

| 層位 | 土色 | 土性 | 標示 |
|---------|-----------------|---------------------|----|
| I-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| I-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| II-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| II-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| III-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| III-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| IV-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| IV-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| V-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| V-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| V-b' | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VI-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VI-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VI-b' | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VII-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VII-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VII-b' | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VIII-a | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VIII-b | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| VIII-b' | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |
| IX | 10YR5% 紆 色 シ ルト | 10YR5% 黑褐色シルトを地盤に含む | |

第10図 第70次調査区土層断面図(2)



第11図 第70次調査区全体図

となつたが、深い部分では 110 cm 程まで耕作による擾乱が及んでいた。特に D 区では全面にわたり 1 m 以上まで擾乱を受けていた。これらのことから、B ~ D 区は重機によって表土・耕作土の堆上を行つた。重機による堆土は擾乱をあまり受けない部分で黄褐色粘土質シルト・砂質シルトの検出された深度までとし、以下は人力により擾乱土を堆土した。天地返しによるウネ擾乱上の堆土に多くの時間を費やし、遺構検出作業は 6 月末日に終了した。

遺構検出作業の結果、A・C 区は遺構の遺存状況がさほど悪くはなかつたが、B・D 区は極めて悪く、特に D 区は殆んど遺構が遺存していなかつた。遺構の精査は B・C・D・A 区の順に行なつた。検出した遺構は竪穴住居跡が多い他は、獨立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土坑等があるが、A 区では推定位置より西に 3 m 程ずれたものの寺院中枢区画の材木列・一本柱列・溝跡が発見された。獨立柱建物跡や溝跡の中には I 期官衙段階のものとみられるものがあり、竪穴住居跡の中には瓦が入っているものがあることから、寺院に関連する遺構と考えられるものがある。

B ~ D 区までの調査が終了した後、その西側の畑を E・F・G 区として調査した。E・F 区は東西 22 m、南北 15 m 程の東西に長い畑地であり、G 区は F 区の南西隅部から南側に張り出した 3 × 3 m の小調査区である。天地返し深耕による擾乱は B 区等の同様 100 cm 程の深度まで及んでおり、E 区東端で自然地形の段差に対応する様な落ち込みと円礎・瓦が堆積した土坑を検出した他、何らの遺構も発見されなかつた。

A ~ D 区までの調査がほぼ終了した 10 月初旬、指導委員会の視察を受けた。また、10 月 14 日には隣接する東長町小学校 6 年生児童の社会科校外授業の一貫として遺跡発掘体験学習授業を実施した。

記録の点検・追加・補足を行ない、11 月 10 日調査を終了し、11 月 25 日～28 日まで埋め戻し、12 月 10 日、整地作業を行つて全ての作業を終了した。

2. 発 見 遺 構

今回の調査によって発見された遺構は一本柱列 1 列、材木列 1 列、獨立柱建物跡 1 棟、竪穴住居跡 8 軒、溝跡 5 条、井戸跡 1 基、土坑 21 基、不明遺構 3 基、小柱穴・ピット 106 などである。これらの遺構は耕作土下層で検出されたが、各地区により遺構検出面までの深さは差異がある。天地返し深耕を行っていない A 区は最も浅く、C 区も遺構遺存度は比較的良かったものの B・D・E・F・G 区は深くまで擾乱が及び、上層の遺構は消失したこととも考えられる。しかし、調査対象区内の西側 (E・F・G 区) は本来より遺構の密度が希薄であったものとみられる。遺構は時期不明のものもあるが、第 3 段階 (I 期官衙)、第 2 段階 (II 期官衙・廃寺)、第 5 - A 段階 (平安時代) に分類されるものがある。

S A1055—一本柱列 長さ 8.6 m 以上、柱間 7 間以上 (柱間寸法 115 ~ 130 cm、平均 120 cm)

で、方向はN-4°-Eである。柱穴は掘り方とみられるもののがなく、上端直径25~30cm、下端径10~20cmの真円形の柱痕跡かとみれるピットで、深さは7~15cmである。堆積土は暗褐色シルトである。西側に並行するS D1067溝跡との間隔は80cm、東側に並行するS A1066木材列との間隔は35~40cmである。第4段階所属。

S A1066木材列 長さ11.1m以上でさらに南北にのび、方向はN-4°-Eである。布掘りは上幅68~70cm、深さ20~30cmで、底面は平坦、壁は直立している。材木痕跡は直径12~20cmの円形で、や・出入はあるものの布掘り西壁際に寄ってほぼ一直線に並んでおり、間隔は平均21cm程でほぼ密接している。布掘り埋土は暗褐色・黄褐色シルトである。西側のS A1055-本柱列と35~40cmの間隔で並行している。S I1060に切られている。第4段階所属。

S B1042建物跡 桁行2間(柱間寸法230~250cm、平均240cm)、総長4.8m、梁行1間(約370cm) 総長3.7mの南北棟建物跡で、桁柱列の方向はN-31°-Wである。柱穴は55~62×80~100cmの不整長方形、深さ10~35cmで、柱痕跡は20~25cmとみられる。E 1 N 2 柱穴埋土には柱沈下防止のためとみられる長さ90cm程、幅12cm程の横木材の痕跡がみられた。柱穴埋土は褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルトなどである。S I1033に切られている。第1段階所属。

S I1028竪穴住居跡 東西4.7m、南北4.7mのほぼ正方形で、東西辺方向はN-2°-Wである。上部搅乱削平のため、貼床面も一部しか遺存していない。西辺際と南辺際に上幅20~40cm、深さ6~12cmの周溝がめぐる。カマドは不明である。主柱穴は4つで、直径30~52cmの不整円形、深さ22~38cmで、柱痕跡は直径18~22cmである。心心距離は245~265cmで、柱中心から壁までの距離は100~110cmとほぼ等距離である。柱穴・ピット内から土師器・須恵器・瓦片が出上している。S D1041を切っている。第4段階所属。

S I1031竪穴住居跡 東西3.6m、南北6.95mの南北に長い長方形で、南北軸方向はN-4°-Wである。北半部は床面直上まで搅乱削平が及んでいるが、南半部では壁高20cmまで遺存し壁は直立気味に立ちあがる。カマドは本体が削平のため遺存していないが燃焼部火床と煙道から、東壁ほぼ中央に施設されている。煙道は上部削平が著しいが、幅22cm、深さ2cmで、煙道先端には直径20cm、煙道底面より3cmの深さの煙出しピットがある。床面は全面に貼床がみられ、カマド前面の住居中央部にはカマドからの焼き出しとみられる炭化物層がみられる。壁際には周囲する上幅7~20cm、床面からの深さ6~8cmの周溝がみられる。堆積土は上から褐色シルト・にぶい黄褐色シルト・暗褐色・黒褐色シルトである。堆積土中より土師器壺・甕片・須恵器壺・高台付壺・高壺・壺片・小玉石・板石・床面上からは土師器壺・丸瓦・板石・カマド底面から土師器壺などが出土している。第4段階所属。

S I1033竪穴住居跡 東西4.4m、南北4.35mのほぼ正方形で、東西辺方向はN-0°-Sの

真北方向である。上部擾乱削平のため、貼床面も一部しか遺存していない。南辺際ほぼ中央にカマド跡とみられる焼上・炭化物の分布があるが、詳細は不明である。床は貼床で、東辺際と北辺際に上幅10~15cm、深さ8~18cmの周溝がみられる。堆積土は暗褐色・黒褐色シルト、黒褐色・黄褐色粘土質シルトである。貼床下層の掘り方埋土は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色シルト、褐色シルトである。堆積土中から土師器壺・甕片・須恵器壺・壺・甕片・瓦片・小玉石・鉄製品残片など、床面上からは土師器壺・蓋・甕片・須恵器蓋・甕片・瓦片・小玉石など、掘り方埋土からは須恵器蓋が出土している。S B1042、SK1046・1047・1050を切っている。第4段階所属。

S I 1034竪穴住居跡 東西6.6m、南北7mの方形で、南北軸方向はN-2°-Eである。上部擾乱が著しく、床面が露出している部分もあるが、平均深さは12cm程である。北辺際ほぼ中央にカマド燃焼部の火床がみられたが、カマド本体は遺存していない。床は貼床で、南辺際と北辺際に周溝がみられる。南辺際の周溝は幅5~7cm、深さ10cm程で、20~50cmごとに途切れおり、板材を縦に差し込んだ痕跡とみられる。北辺際は幅10~15cm、深さ10~15cmである。東西辺際には周溝も板材痕跡も認められない。堆積土は暗褐色・にぶい黄褐色シルトである。主柱穴は4つあり、…ないし直徑70~130cmの不整楕円形・隔丸長方形、深さ60~80cmで、柱痕跡は直徑15~25cmで、各心心距離は400cmで等間である。各柱痕跡と壁との距離は東側柱列から東壁まで、西側柱列から西壁までが120cmで等間、同南側では140~145cm、同北側では150~170cmと不揃いである。西壁から100~120cm、東壁から230~270cmの位置に住居主軸方向とほぼ並行する上幅30~40cm、深さ24~32cmの断面じ字形の溝が2条ある。溝北端は北壁とほぼ一致し、長さ480~500cmで、南壁までは達していない。西側溝は西側主柱列とほぼ一致し、北西柱穴掘り方はこの溝に切られている。堆積土中より土師器壺・甕片・須恵器蓋片・瓦片、床面より土師器壺・瓦片が出土している。SD1041、SX1063・1064を切っておりSE1032、SK1039に切られている。第4段階所属。

S I 1036竪穴住居跡 住居跡の北壁から北東隅の一部を検出したのみで詳細不明。北辺長4.2m、南北2.5m以上の方形とみられ、北辺方向はE-10°-Nである。遺構検出面から床面までの深さは10~12cmであるが、擾乱の及んでいない部分では35~40cmで、壁は直立気味に立ちあがり、西壁際には幅5cm、深さ7cmの周溝がみられる。床は貼床で、掘り方埋土は明黄褐色粘土質シルトである。堆積土中より土師器壺・甕片が出土している。

S I 1061竪穴住居跡 南北3.7m、東西2.9m以上の方形とみられるが、東側は調査区外で不明、西辺方向はN-17°-Wである。深さは検出面から床面まで26~34cmである。北壁際の北西コーナーより1.8m程の部分にカマド跡がみられる燃焼部火床、支脚および土師器蓋が出土している。堆積土はにぶい黄褐色・灰黄褐・暗褐色などのシルト・粘土質シルトで、上層から

床面直上層まで灰白色火山灰が混入しており、特に上層に多量に含まれている。周溝・主柱穴等は検出されない。堆積土中から土師器壊・甕片・須恵器甕片・瓦片、床面からは瓦片・カマドから土師器甕・瓦片が出土している。SK1056に切られている。第5-A段階所属。

S I 1060竪穴住居跡 住居跡の南東隅部分を検出したのみで、上部擾乱削平も著しいことから詳細は不明。東西4.6m以上、南北1.5m以上で、南辺方向はW-0°-Eである。深さ0~13cmである。SA1055を切っている。

S I 1068竪穴住居跡 住居跡の東辺の一部を検出したのみで詳細は不明。東辺長は2.8m以上で、方向はほぼN-38°-Eである。床は貼床で、深さは19cm程度である。堆積土中から土師器壊・甕片が出土している。

S D 1030溝跡 長さ14m以上、上幅33cm、下幅18~26cm、深さ0~8cm、底面はほぼ平坦で断面形はU字形である。方向はE-1°-Nで、さらに東西にのびる。堆積土はにぶい黄褐色、褐色シルト、暗褐色砂質シルトである。

S D 1041溝跡 長さ26.5m以上、上幅45~65cm、下幅35~45cm、深さ0~32cm、底面は平坦で、断面形は逆台形である。方向はN-33°-Wで、さらに南北にのびる。堆積土は暗褐色・褐色・鈍い黄褐色シルトである。堆積土中より土師器壊・甕片が出土している。SX1063・1064を切っており、S I 1028・1034に切られている。第1段階所属。

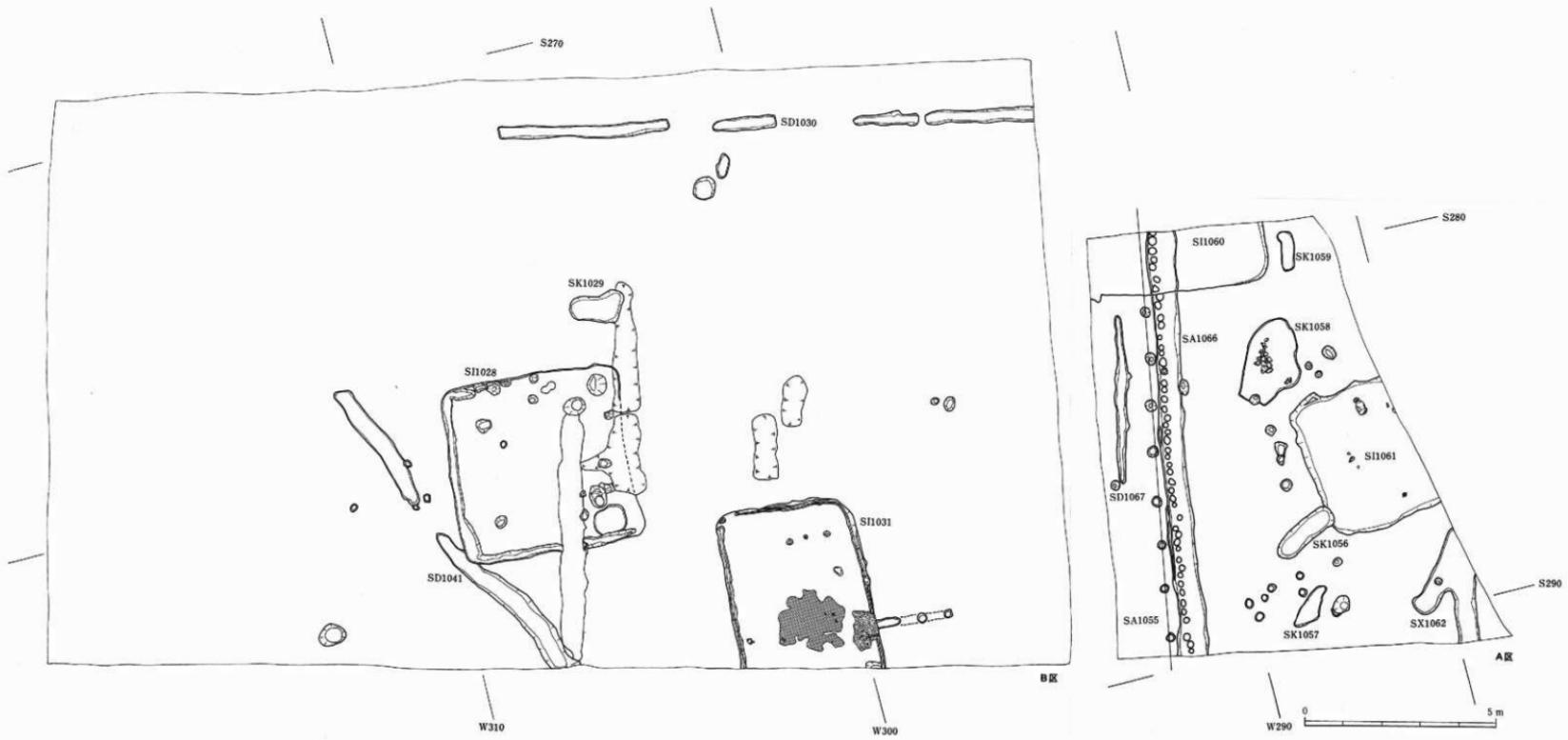
S D 1045溝跡 長さ3.5m以上、上幅15~40cm、下幅10~35cm、深さ6~10cm、底面はゆるやかに凹み、断面形はU字形である。方向はN-51°-Wで、さらに南北にのびる。堆積土は暗褐色・褐色シルトである。

S D 1067溝跡 長さ4.4m以上、上幅15~33cm、下幅8~22cm、深さ0~12cm、底面はゆるやかに凹み、断面形はU字形である。方向はN-4°-Eで、さらに南北にのびる。堆積土は暗褐色・褐色シルトである。SA1055・1066と並行している。

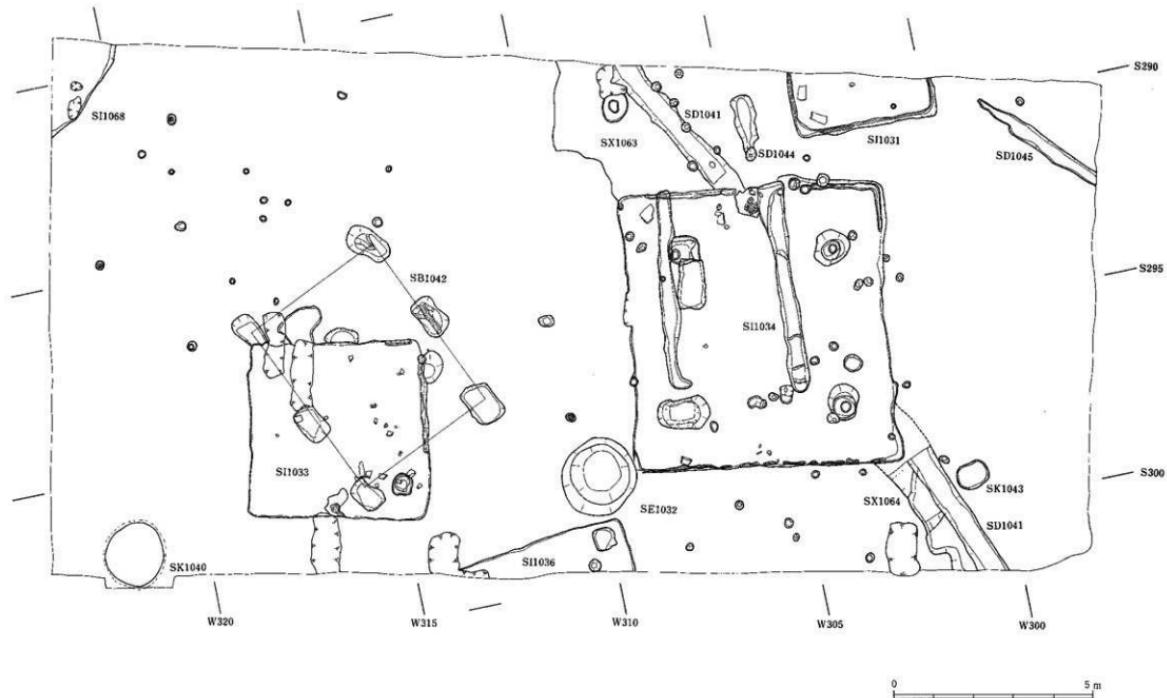
S D 1074溝跡 長さ14.7m以上、上幅3m以上、下幅1.7m以上、深さ80cm、底面は平坦で、壁は直線的にたちあがり、底面30cm程度で幅55cm程度の段を持っています。方向はN-9°-Eで、さらに南北にのびる。堆積土は褐色・黄褐色・黒褐色などのシルトで、堆積土中からは土師器壊・甕片・須恵器片・瓦片が出土している。SK1075に切られている。

S E 1032井戸跡 直径1.9mの円形、底径95cm、深さ3mの素掘りである。壁はほぼ直立している。堆積土は1~16層まで大別され、下層はグライ化している。底面から1.9mまで埋まっていた時点で、水が溜ったとみられる酸化鉄の層がみられる。その後は東側から埋められた堆積状況を示している。堆積土中より土師器壊・高環・甕片・須恵器甕片・瓦片・鉄製品残片・木製品残片が出土している。SI1035を切っている。

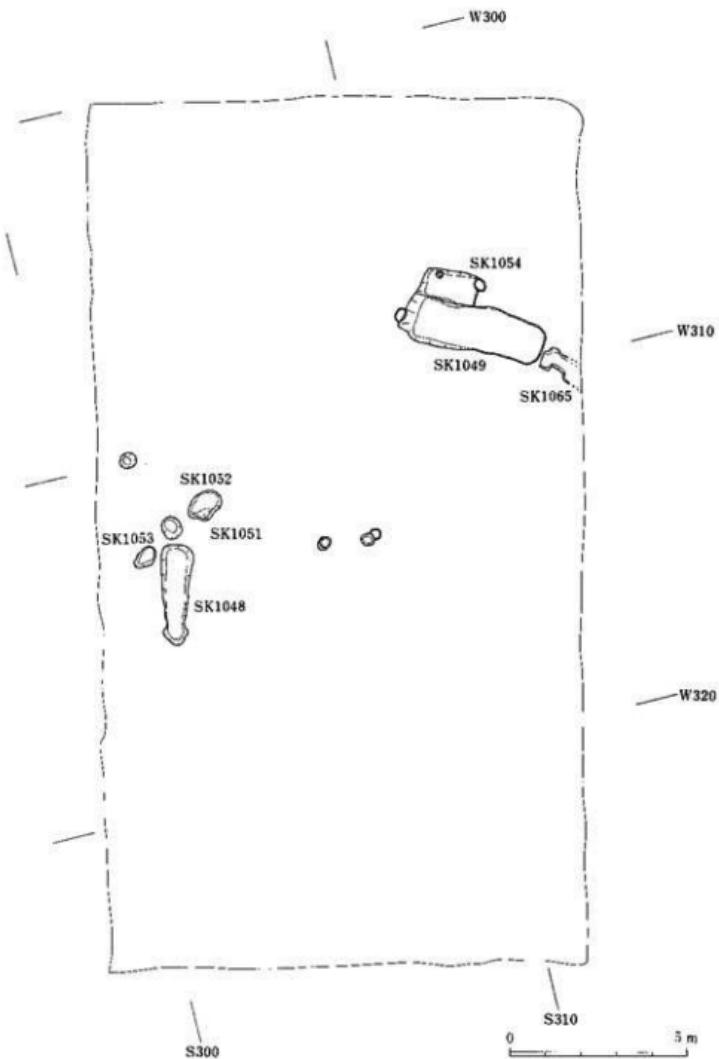
S K 1029土坑 長軸130cm、短軸60cmの不整規円形で、深さ4~8cm、底面はゆるく凹んで



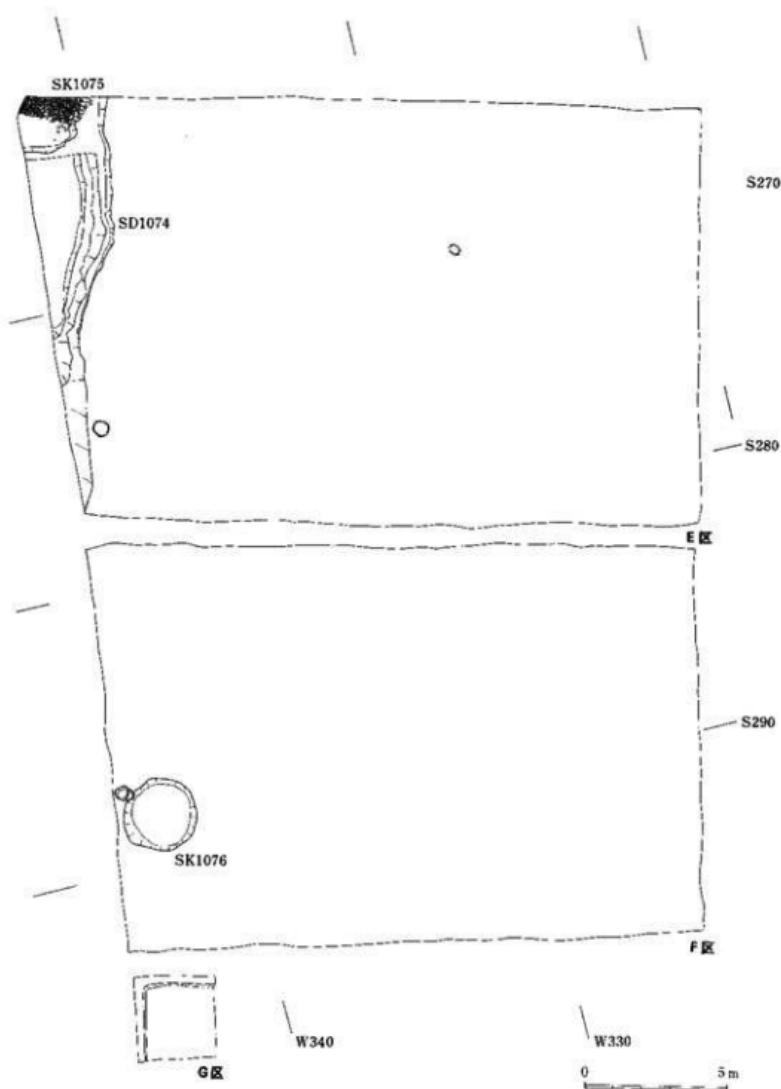
第12回 第70次調査A・B区平面図



第13図 第70次調査C区平面図



第14図 第70次調査D区平面図



第15図 第70次調査 E・F・G 区平面図

おり、堆積土は褐色・黄褐色シルト、にぶい黄橙色粘土である。堆積土中より土師器壺・甕片が出土している。

S K 1039土坑 東西56cm、南北125cmの隅丸長方形で、深さ40cm、底面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ちあがる。堆積土は黒褐色・暗褐色・にぶい黄褐色シルトで底面よりやや上層に炭化物・焼土を多量に含む黒褐色シルト層がある。堆積土中より土師器・須恵器甕片が出土している。S I 1034を切っている。

S K 1040土坑 直径152cm、底径160cmの円形で、深さ52cm、底面は平坦で、壁は内傾して立ちあがるフラスコ形である。堆積土は褐色・暗褐色・にぶい黄褐色のシルト・砂質シルトで堆積土中より土師器壺・甕片が出土している。

S K 1043土坑 71×55cmの不整形方形で、深さ12cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は黒褐色シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

S K 1044土坑 長軸130cm、短軸50cmの不整形円形で、深さ9cm、底面から壁までゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色・黄褐色シルト、明黄褐色粘土質シルトである。

S K 1046土坑 直径55cmの円形で、深さ10cm、底面はゆるやかに凹み、壁は中位に段を持つ。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。S I 1033に切られている。

S K 1047土坑 長軸80cm、短軸45cm以上の不整形円形で、深さ45cm、底面は凹凸あり、壁は下半部が直立気味に立ちあがり、上半部はゆるやかに立ちあがる。東半部のみ検出。堆積土は暗褐色・にぶい黄褐色・褐色シルトである。堆積土中から土師器甕片が出土している。S I 1033に切られている。

S K 1048土坑 長軸282cm、短軸58~91cmの不整長方形で、深さ18cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は褐色・黄褐色シルトである。

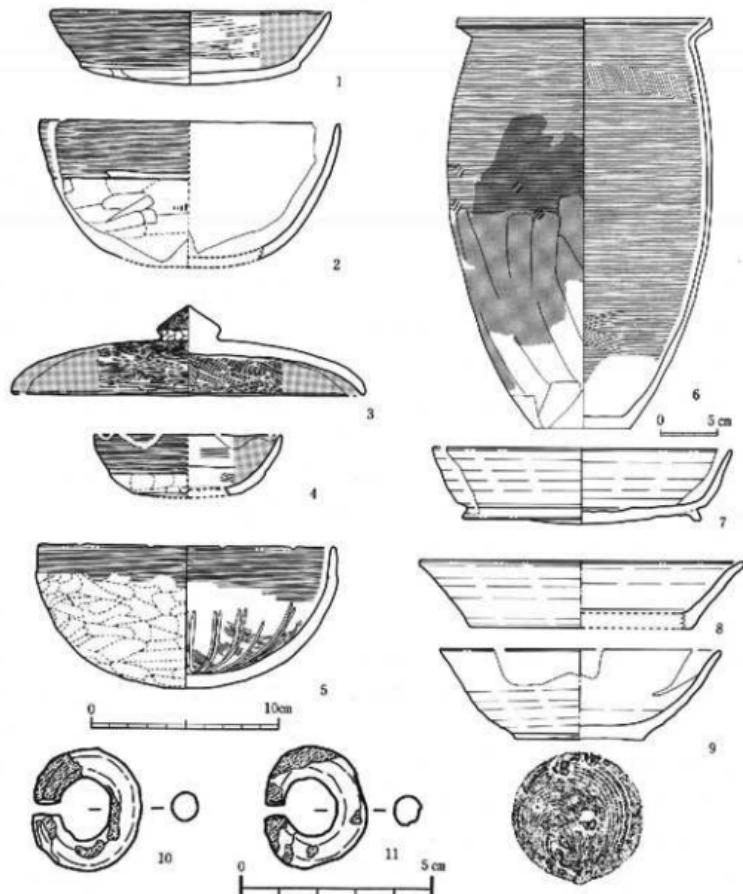
S K 1049土坑 長軸390cm、短軸115~125cmの隅丸長方形で、深さ10~16cm、底面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ちあがるが、北側短辺のみゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色・褐色シルト、にぶい黄褐色砂質シルトである。S K 1054・1056を切っている。

S K 1050土坑 長軸117cm、短軸72cmの不整形で、深さ12cm、底面はゆるやかに凹み、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は黄褐色・褐色シルトである。S I 1033に切られている。

S K 1051土坑 長軸103cm、短軸73cmの不整形円形で、深さ18cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色・灰黃褐色・にぶい黄橙色・灰白色などのシルトで、底面に酸化鉄層がある。

S K 1052土坑 直径63cmの円形で、深さ26cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は灰黃褐色・にぶい黄褐色シルトで、底面に酸化鉄層がある。

S K 1053土坑 長軸72cm、短軸46cmの不整形で、深さ18cm、底面は中央部が凹み、壁は段々



| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器形 | 出土遺跡 | 性質 | 外観測定 | | | 内面調査法 | | | 性質 | 備考 | 写真番号 | | | |
|-------|-------|----|----|---------|-------|-----------|-----------|-----------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|
| | | | | | | 口部 | 体部 | 底部 | 口縁部 | 体部 | 底部 | | | | | | |
| 16-1 | C-635 | 土器 | 环 | S1 1066 | ココナラ | ココナラ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | 3.9 | 11.6 | % | 60-6 | | |
| 16-2 | C-631 | 土器 | 环 | S1 1081 | 直腹 | ヨコナラ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | 15.9 | % | | 60-13 | | |
| 16-3 | C-632 | 土器 | 直 | S1 1093 | 「ひき器」 | 直 | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | ヘラクゼ | 4.8 | 18.8 | % | 60-5 | | |
| 16-4 | C-634 | 土器 | 环 | S1 1084 | ココナラ | ヘラクゼ | ココナラ | ココナラ | ココナラ | ココナラ | ココナラ | 3.2 | 10.0 | % | 60-1 | | |
| 16-5 | C-636 | 土器 | 环 | S1 1061 | 直腹 | ナ | ナ | ナ | ナ | ナ | ナ | 7.6 | 15.8 | % | | | |
| 16-6 | D-18 | 土器 | 直 | S1 1060 | ナ | ナ | ナ | ナ | ナ | ナ | ナ | 36.3 | 22.2 | 8.4 | 宛文又付有 | 60-7 | |
| 16-7 | E-289 | 直器 | 直 | S1 1080 | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | 4.1 | 16.1 | 12.8 | | 60-10 | |
| 16-8 | E-292 | 直器 | 环 | | 直 | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | 3.6 | 17.3 | 11.0 | | 60-11 |
| 16-9 | D-17 | 土器 | 环 | S1 1061 | 直腹 | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | ヨクナラ | 4.8 | 15.0 | 8.8 | | 60-12 |
| 番号 | 登録番号 | 種別 | 器形 | 出土遺跡 | 性質 | 外観測定 | 内面 | 底面 | 内面 | 底面 | 内面 | 底面 | 性質 | 備考 | 写真番号 | | |
| 16-10 | N-42 | 石 | 磨 | SK 1054 | 直 | 3.0-3.2cm | 1.3-1.7cm | 0.7cm | 0.2cm | 0.2cm | 0.2cm | 0.2cm | 光沢 | | 60-14 | | |
| 16-11 | N-43 | 石 | 磨 | SK 1054 | 直 | 2.9-3.1cm | 1.5-1.8cm | 0.7-0.8cm | 0.2cm | 0.2cm | 0.2cm | 0.2cm | 光沢 | | 60-15 | | |

第16図 第70次調査区出土遺物

に立ちあがる。堆積土は褐色・黄褐色シルトである。

S K 1054土坑 長軸 160 cm、短軸90cm以上の隅丸長方形で、深さ13cm、底面はほぼ平坦、壁は直立気味に立ちあがる。堆積土は黄褐色・褐色シルトである。堆積土中より金属製の耳環が2つ出土している。S K 1049に切られている。

S K 1056土坑 長軸 177 cm、短軸56cmの不整椭円形で、深さ23cm、底面はゆるやかに凹み、壁は直立気味に立ちあがる。堆積土は黒褐色・暗褐色・にぶい黄褐色シルトである。S I 1061を切っている。

S K 1057土坑 長軸 130 cm、短軸50cmの不整椭円形で、深さ 6 cm、底面はほぼ平坦である。堆積土は黄褐色シルトである。

S K 1058土坑 長軸 232 cm、短軸150 cmの不整椭円形で、深さ 8 cm、底面は中央部がやや高く、周辺が低いドーナツ状を呈す。堆積土は黒褐色・にぶい黄褐色・褐色シルトで、中央部に拳大の円礫の集石あり。

S K 1059土坑 長軸 109 cm、短軸35cmの不整椭円形で、深さ 4 cm、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐色シルトである。

S K 1065土坑 長さ80cm以上、幅45cmの不整形で、深さ15cm、底面はやや凹凸あり、蛇行しながら溝状にさらに南へ続く。S K 1049に切られている。

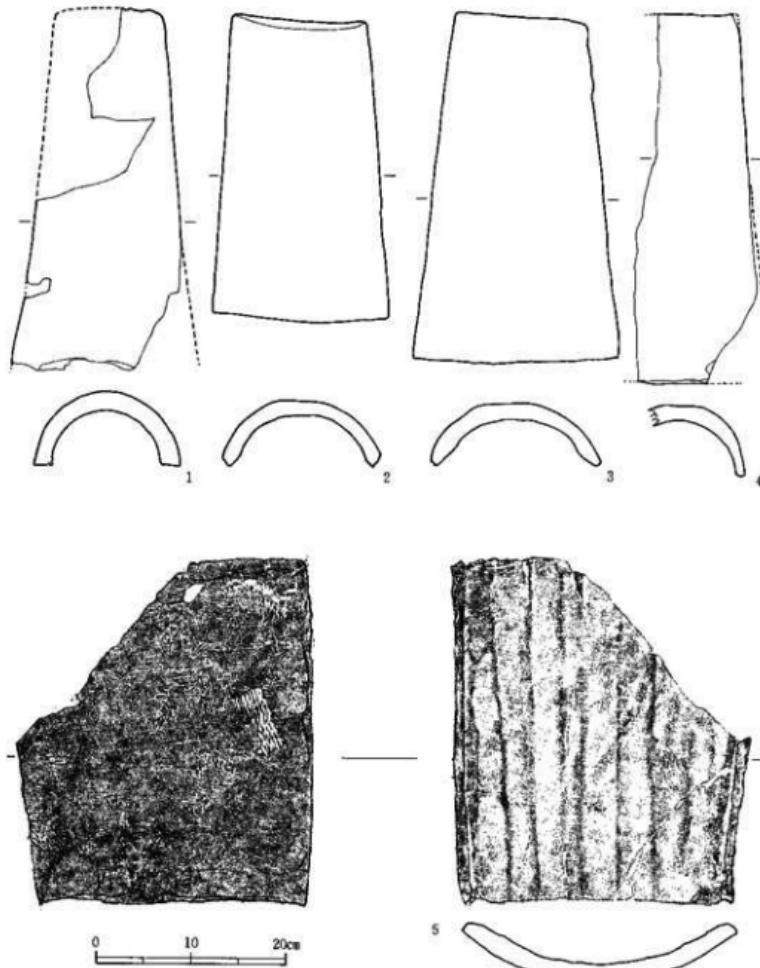
S K 1075土坑 東西 230 cm以上、南北 150 cm以上、調査区の北西隅で一部検出したのみで形状は不明、深さ35cmで、底面はほぼ平坦である。壁は斜めに直線的に立ちあがる。堆積土は暗褐色・灰黃褐色・にぶい黄褐色シルトで、検出面から底面まで多量の拳大の円礫が入り込んでおり、集石は8層程になる。礫と共に瓦片、土師器片、須恵器片、陶器片などが出土している。S D 1074を切っている。

S K 1076土坑 直径 260 cmの円形で、深さ80cm、底面は中央部がやや凹んでいる。壁は下方はゆるやかで、上方は直立気味に立ちあがる。堆積土は黄褐色・褐色・灰黃褐色・にぶい黄褐色シルトである。堆積土中より土師器片、甕片が出土している。

S X 1062不明遺構 上幅55~60cm、深さ15~21cm程の溝状遺構が二又に交わった様な形状で東側と南側にさらに続いており、全形は不明である。堆積土は暗褐色・黄褐色・にぶい黄褐色シルトである。

S X 1063不明遺構 東西 240 cm以上、南北 315 cm以上であるが、全形は不明である。堆積土は灰黃褐色シルトであるが、住居跡の貼床様の固くしまった面を検出し、その層以下は掘り下げなかったため、底面は不明である。S I 1034、S D 1041に切られている。

S X 1064不明遺構 S D 1041の西側に沿って幅60cm、深さ 5 ~12cmで広がっており、壁はゆるやかに立ちあがっている。堆積土は暗褐色シルト、灰黃褐色・黒褐色・暗褐色粘土質シルト、



| 番号 | 登録番号 | 遺物種別 | 性状 | 種類 | 下 特徴 | | 写真 図版 |
|------|------|------------|----|----|---------|---------|----------|
| | | | | | 番種 | 凸面 | |
| 17-1 | F-72 | 構造土 | 瓦 | 丸瓦 | 縞印き日→ナゲ | 布目模 | 61-1 |
| 17-2 | F-73 | SI 1031 床面 | 瓦 | 丸瓦 | 縞印き目→ナゲ | 布目模 | 61-3 |
| 17-3 | F-74 | SI 1031 床面 | 瓦 | 丸瓦 | 縞印き日→ナゲ | 布目模 | 61-2 |
| 17-4 | F-75 | SI 1033 床面 | 瓦 | 丸瓦 | 縞印き目→ナゲ | 布目模 | 61-4 |
| 17-5 | G-61 | SI 1034 床面 | 瓦 | 平瓦 | 縞印き日→ナゲ | 布目模、横背模 | 62-1 |

第17図 第70次調査区出土遺物

にぶい黄褐色砂質シルトである。S I 1034、SD 1041に切られている。

小柱穴・ビット 調査区内全域で106検出されたが、擾乱が比較的浅いA・C区に大半があり、他のB・D・E・F区は擾乱のため消失してしまったものと考えられる。直径15~30cmの不整円形で、底面に柱痕跡のみられるものもあるが、殆んどは不明である。特に集中したり並んだりする部分もなく、出土遺物もないことから、詳細は不明である。

3. 出 土 遺 物

第70次調査による出土遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦・石製品・金属製品などである。竪穴住居跡出土のものが主であり、遺物総量は極めて少ない。以下遺構ごとに略述する。

S A1066材木列 埋土より内面ヘラミガキ黒色処理の平底丸底の土師器C-635壺（第16図1）の他、須恵器壺片、瓦片が出土している。

S I 1031竪穴住居跡 床面上より外面ヨコナデ・ヘラケズリ、内面ヘラミガキ黒色処理の土師器C-631壺（第16図2）、粘土板作り凸面スリケシの玉縁なし丸瓦F-73・74（第17図2・3）の他、カマドより土師器壺片、また、堆積土中より須恵器E-289高台付壺（第16図7）、E-290高壺の他土師器壺・壺片、須恵器壺・壺片、瓦片、黒小玉石2点、板石が出土している。

S I 1033竪穴住居跡 床面上より、宝珠様ツマミの内外面ヘラミガキ黒色処理の土師器C-632壺（第16図3）、粘土板作り凸面スリケシ玉縁なし丸瓦F-75（第17図4）の他、土師器壺・壺片、須恵器壺片、瓦片が出土している。また、堆積土中からは土師器壺・壺片、須恵器壺・壺・壺片、瓦片、黒・白小玉石、鉄製品などが出土している。

S I 1028竪穴住居跡 竪穴内埋土より土師器壺片、須恵器壺・壺片、瓦片、板石が出土している。

S I 1034竪穴住居跡 床面より土師器壺1個体分・括の他、粘土板桶巻作りで、凸面繩印きスリケシの平瓦G-61（第17図5）植物遺存体が出土している。

S I 1036竪穴住居跡 堆積土中から土師器壺・壺片が出土している。

S I 1061竪穴住居跡 床面上から、ロクロ調整で底部回転糸切り無調整の土師器D-17壺（第16図9）、瓦片、カマドからはロクロ調整の土師器D-18壺（第16図6）が支脚の上にのった状態で出土した。堆積土中からは土師器壺・壺片、須恵器壺片、瓦片が出土している。

S I 1068竪穴住居跡 堆積土中から土師器壺・壺片が出土している。

SD 1041溝跡 堆積土中より、外面ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラナデ、放射ヘラミガキの施された土師器C-636壺（第16図5）の他、土師器壺片が出土している。

SD 1074溝跡 堆積土中より土師器壺・壺片、須恵器片、瓦片、板石などが出土している。

S E 1032井戸跡 堆積土中より土師器坏・高坏・甕片、須恵器甕片、瓦片、鉄製品片などが出土している。

S K 1029土坑 堆積土中より土師器坏・甕片が出土している。

S K 1039土坑 堆積土中より土師器甕・須恵器甕片が出土している。

S K 1040土坑 堆積土中より土師器坏・甕片が出土している。

S K 1047土坑 堆積土中より土師器甕片が出土している。

S K 1054土坑 堆積土中より金属製耳環N-42・43(第16図10・11)が2点出土している。

S K 1075土坑 犬大から小児頭大の円礎が検出面から底面まで結まっており、ほぼ同時に一括して投棄された状況を示している。礎堆積層中からは平・丸瓦破片が多く出土したが、他には土師器坏・甕片・須恵器壺・甕片・陶器片・板石などが出土している。

S K 1076土坑 堆積土中より土師器坏・甕片が出土している。

その他、耕作土中からは須恵器E-292坏(第16図8)、F-72軒丸瓦(第17図1)の他、弥生土器片、土師器坏・甕片・須恵器坏・蓋・甕片・平瓦・丸瓦片・陶器片・磁器片などが出土し、遺構検出面からも土師器・須恵器・瓦・陶器・磁器片が出土している。

4.まとめ

発見された遺構は一本柱列1列、材木列1列、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡8軒、溝跡5条、井戸跡1基、土坑21基、不明遺構3基、小柱穴・ピット106などである。これらの遺構は重複関係や方向から3つの段階に大別することができる。この段階区分はこれまでの調査における段階区分(註6)の第4以前・4・5-A段階に相当する。

各段階の遺構の重複関係と変遷は次のとおりである。

[第1段階] S D1041……S B1042



[第4段階] S I 1028……S I 1031

S D1067……S A1055……S A1066……
↓ ↓ ↓
S I 1060……… S I 1033……S I 1034



[第5段階] S I 1061

他の遺構は不明

〔第1段階〕 S B 1042建物跡、S D 1041溝跡

第1段階の遺構はこれまで古墳時代中期の溝跡が数条発見されているが、第31次調査によるS D 324溝跡（註7）は方向がN-60°-Eを示し、上幅200～280cm、下幅30～70cm、深さ70～100cmで、下半部は断面形逆台形を呈する。溝内堆積土中より出土した土器類は東北南半部における土師器編年と型式分類による第Ⅱ型式（南小泉式）（註8）のものである。今回発見したS B 1042、S D 1041の方向と第31次調査によるS D 324とはほぼ直交関係にあり、同一基準方向ともみられる。また、S D 1041堆積土中より出土した土師器C-636壺は仙台市南小泉遺跡3号住居跡出土の壺C-20（註9）仙台市岩切鴻ノ巣遺跡出土の壺B IIId類（註10）との類似性がみられる。鴻ノ巣遺跡においてはB IIId類が含まれる土器群を「引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づける…」としており、南小泉遺跡でもその後の調査によって出土した土器類を集成し検討している（註11）。それによれば、3号住居跡出土の壺C-20をⅡ期（一）の土器群として一括し、5世紀中葉から後半のものとしている。本遺跡で今回出土したC-636壺も南小泉式とみておきたいが、引田式との識別をも含め、年代は検討を要する。また、この壺を出土したS D 1041については壺が1個体のみで共伴資料が殆んどなく、かつ堆積土上面からの出土であることから、直ちに断定しかねるが、第31次調査との共通点からみても古墳時代中期の溝跡とみておきたい。本調査区と第31次調査区とは550m以上離れており、これらが同時期の一連の溝であるとすれば、当該期にこの地区一帯のかなり広い範囲にわたって大事業が実施されたことになろうが、本地域の古墳時代中期頃の様相については殆んど未解明であり、調査成果の蓄積を待つて検討を必要とする。

S B 1042建物跡はS D 1041溝跡とほぼ同様の方向を示していることから、同段階の可能性が高い。これまで、この段階の遺構は溝跡しか発見されていないことから、比較検討できないがS B 1042建物跡は1間×2間と極めて小規模なうえに、柱痕跡も判然としない。S D 1041溝跡と同段階とすれば、古墳時代の建物跡とみられるが、上屋構造、建物の用途等の詳細は不明である。

〔第4段階〕 S I 1028・1031・1033・1034・1060堅穴住居跡、S A 1055一本柱列、S A 1066材木列、S D 1067溝跡

第4段階の遺構群はⅡ期古街および郡山廃寺を構成するものであるが、本調査区は廃寺の推定方二町寺城内に位置しており、発見遺構は寺院に関連するものと考えられる。しかし、寺院中枢地区の西外側に位置していることから、寺院主要遺構は発見されなかった。

S A 1066材木列は南北方向にのびるもので、材木列の基礎部分とみられ、布掘りの西壁寄りに直径12～20cmの丸材がほぼ一直線に並んでいる。これは昭和61年度の第62次調査（註12）により発見されたS A 830材木列と一列になるものとみられる。布掘りや材木列の規模も同様で

あり、布掘り内で材痕跡が一方の壁に片寄っている様相も同一である。第62次調査ではこの材木堀の北西コーナー部分を発見していたが、今回の調査区までこの堀が一直線に延長するものとすれば、コーナーから南へ104mの位置にあたり、さらに南に伸びている。この材木堀を寺院中板御藍を囲むものと考え、基準方向の真北線に合わせ四辺位置を推定していた（註13）。今回発見したSA1066は西辺にあたり、推定位置より西に3m程ずれた位置で発見されたが、材木列の方向が、本調査区内の11m程の区間ではあるが、N-4°-Eを示し、西辺は真北方向をとっていない。他の三辺の調査を行っていないことから全体の規格・範囲は不明であるが、区画施設と御藍中軸線とは方向が一致していないことも考えられよう。

第35次調査では材木堀は跡を示す遺構としては布掘り材木列だけであったが、今次調査区内では、SA1066材木列の西側（区画の外側）に35~40cmの間隔を置いて同方向の一本柱列が発見された。両遺構は重複部分がないことから先後関係の有無は不明であるが、ほぼ密接して並行している。SA1055一本柱列は柱間寸法4尺で、直径10~20cmの柱痕跡のみであり、非常に浅いことなどから、材木列と一体化した構造物ともみられるが、ここでは独立した簡単な堀とみておきたい。また、このSA1055一本柱列のさらに西側（外側）には心心距離80cm程離れて上幅30cm程の浅い溝SD1067があり、これも前二者と同方向で続いている。このSD1067溝跡も材木堀外側の雨落溝や、堀設置と関連する地割溝ともみられるが、ここでは可能性を指摘するにとどめておきたい。

SA1066材木列布掘り埋土中より出土した土師器C-635环は内面黒色処理の有段环であり、口縁部は緩やかにやや内弯気味に立ちあがるもので、この特徴を持つ土器はⅡ期官衙外郭大溝堆積土中より一括して出土する。一群の土器類（註14）の中に含まれる。これらの土器群は東北南半土師器編年（註15）上では第6型式（国分寺下層式）の中の初期段階と考えられ、ここでも国分寺下層式初期のものとみておきたい。寺院中権の区画材木堀の構築とⅡ期官衙外郭大溝の埋まり始めがほぼ同期とも考えられようが、大溝出土の土器群はやや年代幅が考えられるところから、遺構の構築から廃棄までの期間が、土器群の年代幅の中に収まる短いものであったものとみておきたい。

本段階に含まれる竪穴住居跡は5軒とみられるが、各住居跡の出土遺物が極めて少なく、配置関係や主に主軸方向によって分類を行ったため、確定しない。方向により細分すれば、次のとおりである。

- (1) N-2°~4°-W S I 1028, S I 1031
(2) N-0°~2°-E S I 1033, S I 1034, S I 1060

また、同段階の材木堀はN-4°-Eを向いており、(1)のグループとは6°~8°の差異があり、(2)のグループとは2°~4°と近い数値を示している。また、S I 1060はSA1066を切っており、

ほぼ同方向を示す遺構群の中でも新旧関係がみられる。本段階の遺構群は重複・配置関係からみて2小期、方向性からみて2グループに分類できるが、詳細な遺構の変遷は捉えられない。

S I 1031の床面から出土した土師器C-631壺は体部中位に1条の沈線をめぐらし、上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面はヘラミガキ黒色処理を施した壺で、底部は欠損しているが、丸底かとみられる。法量・形態の違いはあるが、調整技法は壺類と同様である。このような特徴を持つ壺は類例がないが、外面にヘラケズリ後一部ヘラミガキが施される壺はⅡ期官衙外郭大溝出土の土器群（註16）の中にみられる。本土器群は国分寺下層式初期段階に位置づけられていることから、C-631も同時期のものとみておきたい。また、共伴する須恵器E-289壺は高台付のものであるが、器高が低く、底部が高台下にはみ出るものである。体部から口縁部の開き出しがゆるいS字状を呈する差異はみられるが、底部が高台下に出るタイプの高台付壺はⅡ期官衙南東部の調査（註17）で、Ⅱ期官衙を構成する1号掘立柱建物跡の柱抜き取り穴の堆積土中より出土しており、Ⅱ期官衙段階の土器とみてよい。この土器と細かな点で違いは認められ、今後資料の増加に伴って先後関係が明らかになることも考えられるが、ここではほぼ同時期の土器とみておきたい。

S I 1033の床面から出土した土師器C-632蓋は内外面ヘラミガキ黒色処理を施し、宝珠様ツマミを付けている。土師器蓋は殆んど出土例がなく、わずかに本遺跡第30次調査（註18）の他には仙台市善應寺横穴8号出土のもの（註19）がみられる程度で、比較検討に難がある。今回出土したC-632蓋は須恵器蓋の模倣形態と考えられ、中村浩氏による陶邑窯跡群出土の須恵器編年（註20）によれば、内面のカエリが消失するⅣ型式以降の蓋をモデルにしたものとみられる。器高がまだ扁平化する以前の形態を持っていることやツマミの宝珠がくずれていないとなどから、第Ⅳ型式でも初期の第1段階と並行するものとみておきたい。また床下層から出土した須恵器E-288蓋は内面にカエリを持つもので、前述の須恵器編年上、Ⅲ型式のものに類似しており、カエリの形態が小さいことから、カエリ消失直前のⅢ型式終末第3段階に並行するものとみておきたい。

本段階の遺構は前述した通り、2小期あるいはそれ以上の変遷となる可能性があるが、出土資料が少なく、変遷の詳細は不明である。本段階遺構群の年代観はこれまでの成果と矛盾なく、7世紀末から8世紀初頭とみて差つかえないが、本地区で発見された遺構群は8世紀初頭を中心とする年代が考えられよう。寺院の造営は7世紀末葉から始まるものと考えられるが今回発見した竪穴住居跡は堆積土中から瓦も出土することや前述した土器の年代観から、寺院造営以前とみるより、造営期もしくは造営後とみられよう。住居跡がやまとまってみられる地区は寺院中軸を区画する塀跡の西側（外側）に位置しており、これらの住居群が寺院に関連するものかどうか今回の調査では明らかにできなかったが、寺院仮想中軸線の方向である真北

方向をほぼ基軸として造られていること、寺院建物と同時併存していた可能性が高いことなどから、広義の寺院関連施設とみておきたい。堀で囲まれた寺院中庭伽藍の外側で、方三町と推定される寺域の内には関連諸院の存在が十分想定されるが、住居群がどのような役割を担ったものかは不明である。ここでは寺に何らかの形で関わった人々の居住区であった可能性を指摘するにとどめておきたい。今後周辺地区の調査成果を待って検討を要する。

〔第5-A段階〕 S I 1061堅穴住居跡

本段階の遺構は堅穴住居跡1軒のみであるが、推定寺域内における調査では第62次調査（注21）で本段階に含まれる掘立柱建物跡や土坑が発見されている。出土した土器や上坑堆積土中に混入した灰白色火山灰などから、遺構群の上限年代を火山灰降下時の10世紀前半代とし、第4段階のⅡ期官衙・寺院遺構群と200年にも及ぶ断絶期間があることから、官衙・寺院とは直接関係しないものとみている。今回発見したS I 1061も堆積土中から瓦片などが出土しているものの、床面・カマドから出土の土師器环・甕はクロ調整によるもので环は底部糸切り無調整であり、床面上から検出面に至る深さ16cm程の堆積土中に前述の灰白色火山灰が多量に混入しており、住居廃棄後まもなく火山灰が降下したものとみられる。ここでも本段階の遺構と寺院との関連は見い出せないが、寺院域内の一带に平安時代中期以降の遺構群が希薄ではあるが存在していることは明らかである。これら平安期の遺構群が集落を構成するものか否か、未だ資料が乏しく断定し得ない。

VI 第71次発掘調査

1. 調査経過

第71次調査は、仙台市郡山三丁目24-8 斎藤芳雄氏より、郡山三丁目127-13において住宅新築計画の申し入れが、7月にあったことから、9月1日より敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町Ⅱ期官衙域のほぼ中央部にあたり、昭和55年度第2次調査区を含み、昭和57年度第31次調査区の南側に隣接する畠地である。この地区一帯では第2次・第24次・第31次調査によってⅡ期官衙の建物跡や溝跡のほか、Ⅰ期官衙の倉庫建物群や官衙雑舎建物群およびそれらを囲む材木列や一本柱の壠跡など多くの遺構が検出されている。今回の調査区は第2次調査区のすぐ東側に隣接することから、第2次調査によって検出された遺構の延長が予想された地区である。

調査は敷地の東側に南北9.5m、東西5.6m



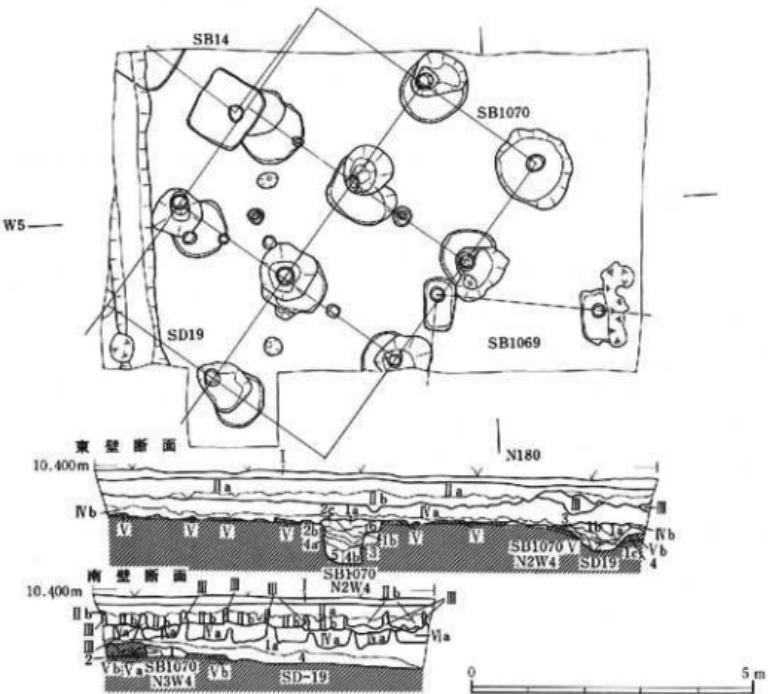
第18図 第71次調査区位置図

の南北に長い調査区を設定し、第2次調査の結果深さ約1mまでは耕作による攪乱が及んでいることが明らかになっていたため、遺構検出面である第V層上面より5~10cm程の高さまで残し、重機によって表土・耕作土を除去した。遺構検出作業は人力によって残った耕作土を天地返し下面まで掘り下げて行なった。検出した遺構は掘立柱建物跡、溝跡、小柱穴・ピットなどである。出土遺物はきわめて少なく、各遺構の明確な時期決定にはいたらなかった。

調査は9月1日より開始したが、天候の不順と湧水に悩まされ、すべての調査が終了したのは10月16日である。

2. 発見遺構・出土遺物

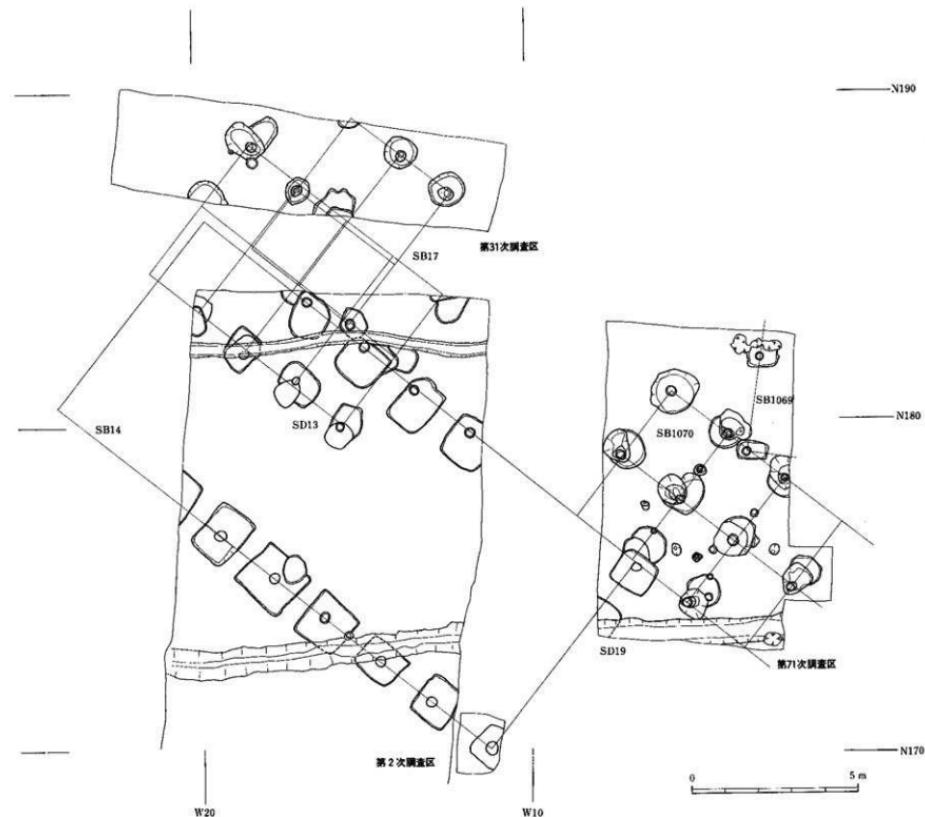
今回の調査によって発見された遺構は掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、小柱穴・ピット14である。官衙に伴うと考えられる遺構は掘立柱建物跡だけで、そのうちの2棟はⅠ期官衙に属する。すべての遺構は耕作土下の第V層上面で検出しているが、本米の掘り込み面はすべてこれよりも上位であったと思われ、後世の耕作に伴う天地返しによる攪乱のため第V層上面が遺構検出



土色 記

| 層位 | 土色 | 土性 | 層 |
|-------------------|--------------|--------|--|
| I | 10YR% 黄褐色 | シルト | (耕作土) |
| II a - II b | 10YR% 黄褐色 | シルト | (天地混じ) 10YR% 黄褐色粘土質シルトを主体とする |
| V a | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 全体的にマンガン斑を含む。10YR% 黄褐色シルトを含む |
| V b | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 全体的にマンガン斑を含む |
| SB1070 NW4 | | | |
| 1 | 10YR% にせい黄褐色 | シルト | 10YR% 明黄色褐色。10YR% 明黄色シルトを耕状に含む |
| 2 | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色。10YR% 明黄色シルトを含む |
| SB1070 NW3 | | | |
| 1 a | 10YR% にせい黄褐色 | シルト | 10YR% 明黄色褐色。10YR% 明黄色シルトを耕状に含む |
| 1 b | 10YR% にせい黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色。10YR% 明黄色シルトをブロック状に含む |
| 2 a | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む |
| 2 b | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色。10YR% 明黄色シルトを耕状に含む |
| 3 | 10YR% 中間色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色シルトを耕状に含む |
| 4 a | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色。10YR% 明黄色シルトを耕状に含む |
| 4 b | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色シルト。10YR% 明黄色粘土質シルトを小ブロック状に含む |
| 5 | 10YR% 明黄色褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色粘土質シルトをブロック状に含む |
| 6 | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 明黄色褐色粘土質シルト。10YR% 黄褐色シルトをブロック状に含む |
| SD19 | | | |
| 1 a | 7.5YR% 黑褐色 | 粘土質シルト | 無鉄状。マンガン斑を全体的に含む |
| 1 b | 10YR% 黑褐色 | 粘土質シルト | 無鉄状。マンガン斑を全体的に含む |
| 1 c | 10YR% 黑褐色 | シルト | 10YR% 黑褐色。10YR% 明黄色褐色シルトをブロック状に含む |
| 2 | 5YR% 黑褐色 | シルト状粘土 | 10YR% 明黄色褐色シルトと粘土状を小ブロック又は耕状に含む |
| 3 | 10YR% 黑褐色 | シルト | マンガン斑を全体的に含む |
| 4 | 10YR% 黄褐色 | 粘土質シルト | 10YR% 黄褐色粘土質シルトを小ブロック又は耕状に含む |

第19図 第71次調査区平・断面図



第20図 第71次調査区全体図

面となつたものである。

S B14建物跡 柱穴2つを検出したことによって建物の東側が明らかとなった。第2次調査によって北側柱列、南側柱列が確認されており、更に第31次調査区では北側柱列の延長線上に柱穴が検出されなかつことから、桁行8間、梁行3間と考えられる東西棟建物跡である。桁行は柱間寸法が190～228cm（平均210cm）で推定総長16.5m、梁行は柱間寸法が240cm等間と考えられ総長7.2mである。柱穴掘り方は一辺110～180cmの方形で、桁柱列の方向はE-32°-Sである。S B1070を切っており、S D19に切られている。

S B1069建物跡 南北1間以上（柱間寸法285cm）の建物跡であるが棟方向は不明である。柱列方向はN-2°-Eである。柱穴は短辺42～67cm、長辺89～99cmの不整長方形を呈し、柱痕跡は直径24～28cmである。S B1070を切っている。

S B1070建物跡 南北2間（柱間寸法230～245cm、平均241cm）、総長4.75m、東西3間以上（柱間寸法210～216cm、平均213cm）、総長6.44m以上の東西棟の総柱建物跡で、桁柱列の方向はE-31°-Sである。柱穴は直径100～136cmの不整円形を呈し、柱痕跡は直径19～34cmである。北1西1柱穴を除き、すべて柱抜取り穴を伴つてゐる。抜取り穴は72～107cmの不整形で、深さは28～78cmである。北2西3柱穴より須恵器壺片が1点出土している。S B14・1069、S D19に切られている。

S D19溝跡 上幅70～90cm、下幅36～52cm、深さ17～26cmで、底面はほぼ平坦で断面形はやや扁平な逆台形を呈する。方向はE-10°-Nである。検出分の総長は5.6mであるが、更に東西へ続いていると考へられる。堆積土は灰黄褐色・明黄褐色・褐灰色・灰褐色の粘土質シルトなどである。堆積土中より土師器壺、壺片、瓦片、鉄滓が出土しているが、いずれも細片である。S B14・S B1070を切っている。この溝は第2次調査の際に検出された溝の延長部分と考えられ、第2次調査の際の検出分からの総延長は18.6mである。

小柱穴・ビット 調査区内で14の小柱穴・ビットを検出した。直径35cm程の円形の掘り方に直径15cm程、深さ15cm程の柱痕跡が認められるものから、きわめて浅い柱痕跡だけのものまで様々である。他の遺構を切るものが多く、調査区の中央から南部にかけてのみ分布している。

耕作土中からは土師器壺・壺片、須恵器壺・壺片、鉄滓、小玉石などが出土している。

3. まとめ

発見された遺構は掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、小柱穴・ビット14である。これらの遺構は重複関係・方向等から3つの時期に区分される。このうち最も新しい時期のS D19についてはその所属段階が明らかではないが、それ以外の遺構はこれまでの調査における段階区分の第3・4段階に相当する（註22）。

(第3段階) S B14・1070建物跡 I期官衙段階

2棟の建物跡には直接的な重複による新旧関係が認められ、S B1070建物跡が古く、S B14建物跡が新しい。

S B1070建物跡は総柱建物跡で、これまでの第2次・第24次・第31次調査などによってこの付近一帯には官衙に伴う倉庫と考えられる総柱建物跡が存在することが明らかになっており、S B1070建物跡もそれらの一角を構成するものであろう。またS B1070建物跡の存在によって総柱建物群の分布が、更に東側へ広がることが予想される。

S B14建物跡は第2次調査によって検出され、北側柱列が第31次調査区までは延びないことから西側柱列の位置が第2次調査区と第31次調査区との間に想定された建物跡である。今回の調査によって東側柱列の位置が確認され、全容がほぼ明らかとなった。この建物跡の桁行8間(55尺)、梁行3間(24尺)という規模は、この付近一帯のI期官衙に属する建物跡群の中では最大のものであり、他の建物跡とは異なった性格をもつものと考えられる。

(第4段階) S B1069建物跡 II期官衙段階

S B1069建物跡はI期官衙段階の遺構であるS B1070建物跡を切っており、柱列方向がN-2°-Eとほぼ真北方向であることからII期官衙段階の遺構と考えられる。しかし、柱穴2つのみの検出であるので全体の規模や性格については不明である。

本調査では、I期官衙段階の倉庫と考えられる総柱建物群の分布が少なくとも本調査区まで広がることが確認され、S B14建物跡の全容をほぼ明らかにすることができた。しかし、S B14建物跡の性格については、今後更に今回の調査区の南側地区や第2次調査区の西側地区などの調査によって検討していく必要がある。

VII 第72次発掘調査

1. 調査経過

第72次調査は、仙台市郡山三丁目23—1赤井沢政一氏より、郡山三丁目5—1において住宅新築のため昭和61年11月17日付けで発掘届が提出され、昭和62年10月5日より敷地内の発掘調査を実施した。

調査地区は、方四町Ⅱ期官衙のほぼ中央部にあたり、官衙中軸線と東辺部の中間に位置する所である。現況は畠地となっており、表面調査では土器・瓦片等は散布していない。

調査は、敷地の西側に5×9mの東西に長い調査区を設定し、天地返し等による擾乱が深くまで及んでいることが予想されたことから、重機を使用して盛土・耕作土を排除した。排土後層上面にて遺構の検出作業を行ない、地表下80cmの灰黄褐色粘土質シルト層（地山）の上面で一本柱列・掘立柱建物跡・堅穴住居跡等の遺構を検出した。しかし、調査区が狭小であったことから、各遺構の全容を知り得ず、出土遺物も極めて少なかったことから年代の検討を十分に行なえなかった。調査は10月15日全てを終了し、16日埋め戻し作業を行なった。

2. 発見遺構・出土遺物

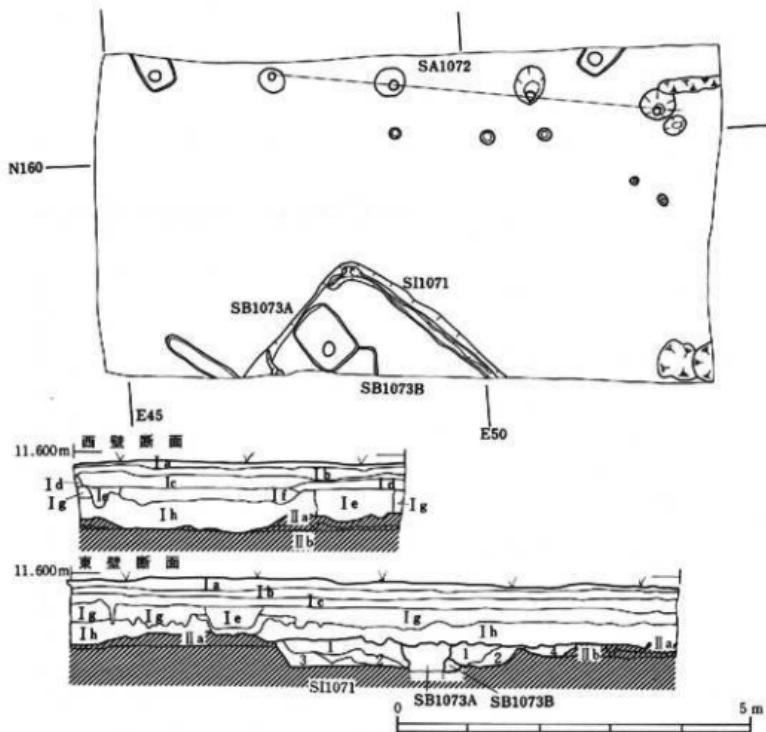
発見された遺構は、一本柱列1列、掘立柱建物跡柱穴3、堅穴住居跡1棟、ピット6等である。

S A 1072—一本柱列 東西方向にのびる一本柱列で、方向はE-2°-Sである。柱間は3間以上で、検出分の総長は5.5mであるが、さらに東へ続いていると考えられる。柱間寸法は175～190cm（平均182cm）である。柱穴は32×40cm～43×52cmの円形もしくは不整円形を呈し、柱痕跡は直径12～16cmである。柱穴掘り方埋土は灰黄褐色・にぶい黄褐色シルトで、柱穴内より土師器壺片が出土している。この遺構は、調査区北側に広がり掘立柱建物跡とも考えられる。

S A 1073A・B 建物跡 A Bとも柱穴を1つ検出したのみで、規模・方向等は不明であり、



第21図 第72次調査区位置図



土色 註記

| 層位 | 土 色 | 土 性 | 備 考 |
|---------|----------------|--------|--------------------------------|
| I a | 10YR 5% 淡白色 | 砂 | 盛土 |
| I b | 10YR 5% 浅黃褐色 | 砂質シルト | 盛土 |
| I c | 10YR 5% 暗黃褐色 | シルト | 盛土 黃褐色土をブロック状に含む |
| I d | 10YR 5% に赤い黃褐色 | 砂質シルト | 耕作土 |
| I e | 10YR 5% に赤い黃褐色 | シルト | 耕作土 |
| I f | 10YR 5% に赤い黃褐色 | シルトト | 耕作土 塩化物を少量含む |
| I g | 10YR 5% 暗黃褐色 | シルトト | 耕作土 |
| I h | 10YR 5% に赤い黃褐色 | シルト | 下部に炭化物を含む |
| II a | 10YR 5% 暗黃褐色 | 粘土質シルト | 10YR 5% 明黄褐色シルトをブロック状に含む |
| II b | 10YR 5% 明黄褐色 | 粘土質シルト | |
| SI1071 | | | |
| 1 | 10YR 5% 暗黃褐色 | 粘土質シルト | 10YR 5% 明黄褐色シルトをブロック状に含む |
| 2 | 10YR 5% 暗黃褐色 | 粘土質シルト | 上部に炭化物を少暈含む |
| 3 | 10YR 5% に赤い黃褐色 | 粘土質シルト | 黃褐色土をブロック状に含む |
| 4 | 10YR 5% に赤い黃褐色 | 粘土質シルト | (堆積) 燃土を多量に含む |
| SB1073A | | | |
| 1 | 10YR 5% 黑褐色 | シルト | (掘り方) 10YR 5% 明黄褐色土をブロック状に含む |
| SB1073B | | | |
| 1 | 10YR 5% 増褐色 | 粘土質シルト | (掘り方) 炭化物を10YR 5% 明黄褐色土をまばらに含む |

第22図 第72次調査区平・断面図

遺物は調査区の南側に広がるものと考えられる。柱穴は、Aが39×65cm以上の隅丸長方形を呈するものと考えられ、Bは68×93cmの隅丸長方形を呈する。柱痕跡は、Aは不明であるが、Bは直径21cmを計る。柱穴掘り方埋土はAが暗褐色粘土質シルト、Bは黒褐色シルトである。Bの埋土中より、土師器壊片・甕片が出土している。S I 1071を切っている。

S I 1071竪穴住居跡 南北2.3m以上、東西2.8m以上の隅丸長方形を呈する住居跡と考えられる。西壁部にカマドが設けられている。煙道は幅25cm、長さ120cmである。床は貼床であり、検出面から床面まで25~30cmを計る。北壁に沿って幅7~18cm、深さ11~15cmの窓溝がめぐらされており、一部壁寄りのところをさらに幅8cm、深さ5cm程一段掘り下げている部分もある。方向は煙道中軸線でE-31°-Sである。遺物は堆積土中より土師器甕片・須恵器壊片が出土し、貼床上面から土師器甕片が出土している。

ピット ピットは6個検出された。いずれも出土遺物はない。

また、調査区北辺で掘立柱建物跡の柱穴跡が2つ検出されている。どちらも建物は調査区の北側に広がると考えられ、規模等は不明である。柱穴は西側のものが47×62cmの隅丸長方形を呈し、柱痕跡は直径17cmを計る。柱穴掘り方埋土は暗褐色シルトである。東側の柱穴は、45×53cmの隅丸長方形を呈し、柱痕跡は直径23cmを計る。柱穴掘り方埋土は黒褐色シルトである。

4. まとめ

今次調査では、一本柱列1列、掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡1棟、ピット6が発見された。各遺構の全容が明らかでないことから詳細な検討が行なえないが、重複関係、方向から年代検討をしておきたい。

S B 1073建物跡は柱穴が1つのみであるが、掘り方の方向や柱列の推定により、真北を基準方向とするⅡ期官衙の構造とはみなし難く、ここではⅠ期官衙段階のものとみておきたい。さらにこの建物より先行するS I 1071竪穴住居跡も壁および煙道の方向がE-31°-Sを示しており、出土遺物からの検討ができないが、Ⅰ期官衙段階のものとみておきたい。建物跡・竪穴住居跡ともその性格は不明であるが、S B 1073A・B建物を建て替えとみれば、竪穴住居跡とあわせ、Ⅰ期官衙段階で3小期の変遷があったことをこの地区でも認められよう。

S A 1072-本柱列は、柱間寸法6尺、柱痕跡も直径12~16cmと小規模であるが、方向がE-2°-Sとほぼ真東西方向に近似しており、他遺構との重複や出土遺物がなく検討資料に乏しいが、ここではⅡ期官衙段階の堀跡とみておきたい。極めて簡便な堀であるが、この様な小規模遮蔽施設の存在は、この周辺に同時の構造物が近接して存在することが想起されよう。

この地区がⅠ期・Ⅱ期においてどの様な性格を持っていたかについては、周辺地区的今後の調査を待って検討していく。

VII 第74次発掘調査

1. 調査経過

第74次調査は、方四町目期官街の外郭南辺材木列上にあたり、昭和55年度に調査を行なった第8次と第9次調査区の間に位置し、外郭南門（第56次調査区）から東へ約70m、外郭南東コーナーから西に約140mの地点にあたっている（註23）。また、ここは外郭南辺総長（4町=428m）の3分割点にある。外郭の3分割点における遺構確認調査は、昭和56年度に西辺で行なった第16次調査（註24）があり、外郭材木列をまたぐ櫓状建物跡を確認している。このことから、外郭南辺においても外郭3分割点における付設構造物の存在を確認する目的で、今次調査が計画された。この地点は、現況が水田であり、春から秋までは周辺一帯に水が入り調査不可能であることから、稻刈後の調査となった。

現況からは外部施設の存在を伺い知ることがで

きず、表面調査でも土器片・瓦片等の遺物の散布は認められなかった。

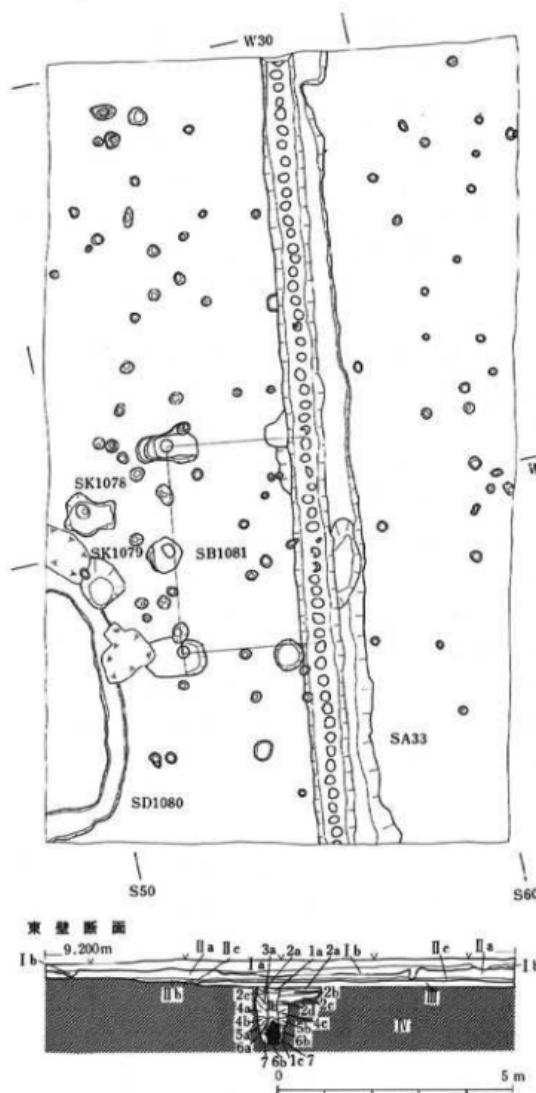
調査は11月10日より開始し、外郭材木列の推定位置を中心に南北10m、東西17mの調査区を設定した。人力で水田耕作土を排除し、水田底土直下で遺構検出作業を行なった。その結果、調査区北側では地表下30cmの地山面（にぶい黄橙色粘土質シルト層）で遺構を検出したが、調査区中ほどから南側にかけて検出面が階段状に深くなり、南側では現水田下層にさらに2枚の水田耕作土層が認められた。下層の水田耕作土下面からは最近のガラス片等も出土し、地表下62cmの地山面まで耕作による擾乱が及んでいた。地山上面精査の結果、外郭推定位置で材木列を検出した他、櫓状建物想定位では材木列に付設されたとみられる構造物を1棟検出した。材木列は材の遺存状況が良好である。調査は12月10日に終了し、11日に重機を使用して埋め戻しを行ない全ての作業を終了した。

2. 発見遺構・出土遺物

発見された遺構は、材木列1列、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑2基、ピット83等であ



第23図 第74次調査区位置図



| 東京断面 | | | | | | | |
|---------|---------------|--------|---|-----|-------------------------------|---------------|---|
| 層位 | 土色 | 土性 | 質 | 層位 | 土 | 土性 | |
| 本層 | 褐色 | 粘土質 | 砂 | 2-1 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質 粘土質シルト | 砂 褐色を多く含む 多量の無機物を含む |
| 1-a | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質 | 砂 | 2-2 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| 1-b | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 2-3 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| 1-c | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 2-4 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| 1-d | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 2-5 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| 1-e | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 2-6 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| II-a | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 3-1 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| II-b | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 3-2 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| III-a | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 4-1 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| III-b | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 4-2 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| SAS33切方 | | | | 4-3 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| 1-a | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質 | 砂 | 4-4 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| 1-b | 10YR 5/4 医院褐色 | 粘土質シルト | 砂 | 5-1 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| 1-c | 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 | 砂 | 5-2 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| | | | | 6-1 | 10YR 5/4 深褐色 10YR 5/4 深褐色 | 粘土 粘土質 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |
| | | | | 7 | 5Y 0 オリーブ色 5Y 0 橄榄色 | 粘土 粘土 | 砂 10YR 5/4 深褐色を含む 10YR 5/4 深褐色を含む |

第24図 第74次調査区平・断面図

る。

S A 33材木列 第4、7、42、43、56次調査で検出された材木列と同一のもので、真東西方向に16.8mにわたって検出した。掘り方は、一部東西端部で広がっているが、幅120～132cmの布掘りで、深さ20～70cmでゆるい段をつけ、さらに幅70～80cm、深さ120～138cm程の壁面が直立する下段掘り方がある。検出面から最深部までの深さは約140cmを計る。布掘りの中央には直径22～28cm程の材が、心々間隔30cm程で57本ほぼ密接して立ち並んでいる。材は芯持ち材と割材が混在しており、57本中芯持ち材18本、割材38本である。そのほとんどが丸材であり一部角材とみられるものもあるが、腐朽が著しく断定できない。布掘り埋め土は、にぶい黄橙色・明黄褐色・暗褐色のシルト、黄褐色・褐色・にぶい黄褐色・明黄褐色の粘土質シルト、にぶい黄褐色・にぶい黄橙・灰黄褐色・オリーブ灰の粘土上で下部のグライ化が著しい。

遺物は布掘り方埋土中より、土師器片・須恵器片・瓦片・弥生土器片・石器等が出土している。土師器片・須恵器片・瓦片はいずれも細片であり、詳細は不明である。弥生土器片は、1点のみ蓋と考えられるもの以外は器形を断定するに至らなかった。文様は口縁部外面に沈線による変形工字文が施されている。中には沈線の交点部分で粘土の膨去、盛り上げがみられるものや、繩文を施し沈線を刻んだ後に沈線間の禪文を擦り消したものが見られた(図版62-3)。石器は、石錐K-20(第26図5)が1点の他は、全て剝片である。

S B 1081構造物 調査区のほぼ中央部から、掘立柱建物跡の柱穴を3つ検出した。方向はほぼ真東西方向であり、S A 33材木列と平行するものである。これらの柱穴に対応する柱穴が南北方向に検出されないことから、材木列に何らかの形で直接取り付く構造物と考えられる。規模は東西2間、南北1間となり、柱穴間隔は東西に218～224cm(約7尺)、南北に296～297cm(約10尺)を計る。柱穴掘り方は、52×130cm～80×130cmの隅丸長方形か不整円形を呈し、柱痕跡は直径26～28cmを計る。掘り方埋土は、にぶい黄褐色・褐色・黒褐色の粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

S D 1080溝跡 調査区の北西部でU字状の溝跡を検出した。さらに調査区の北側にのびると考えられ、長さは6.8mまで計れた。幅44～62cm、深さは12cmを計り、断面形は逆台形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色・にぶい黄橙色の粘土質シルトで、堆積土中より土師器片が出土している。

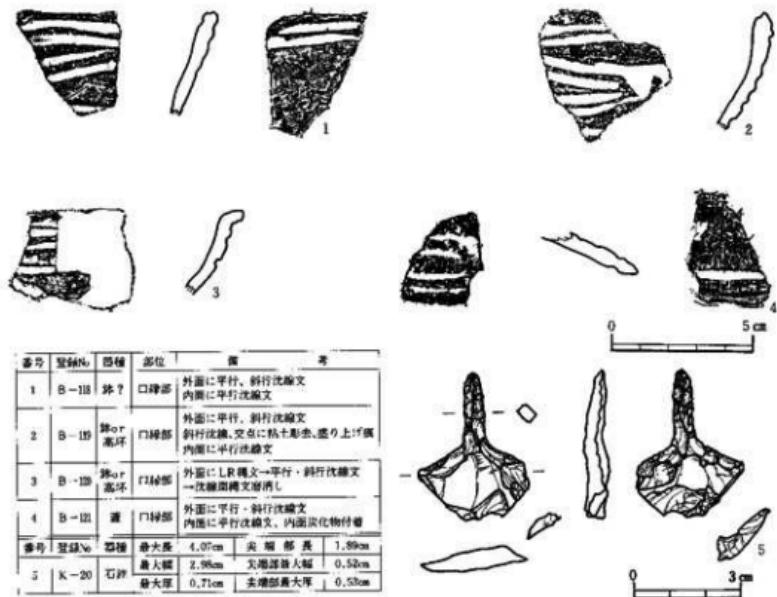
S K 1078土坑 短軸72cm、長軸106cmの楕円形で、深さは8cm、断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色粘土質シルトで土師器片、甕片、須恵器片、甕片が出土している。中央部をピットに切られている。

S K 1079土坑 短軸85cm、長軸100cmの楕円形で、深さは25cm、断面形は偏平J字形である。堆積土は黒褐色シルトである。遺物は出土しなかった。S D 1080を切っている。

他に出土遺物として、水田耕作土中から土師器片・甕片、須恵器片・壺片、瓦片（古代～近世以降まで）、陶器片、板石・石・鐵滓などがある。

3. まとめ

今次調査は、方四町Ⅱ期官衙外郭南辺の3等分割位置における外郭付設備造物の存在の確認を目的とした調査であった。その結果、外郭南辺3等分割の位置（外郭南辺東コーナーから西へ142mの位置）で、外郭に付設されたと考えられる東西2間、南北1間の掘立柱構造物を1棟発見した。この構造物が付設された位置で外郭材木列は全く構造上の変化がみられない。外郭材木列と平行に3m離れて柱間寸法約7尺2間分の柱穴3つを検出したのみで、材木列に取り付くとみれば、梁材と材木列材との接続状況など上部構造に疑問点が残り、建物跡と断定し得ない。ここでは外郭に付設された何らかの構造物とみておきたい。外郭3等分割位置における付設構造物はこれまで西辺の南3分割位置で、材木列を跨ぐ構造の槽状建物跡を1棟発見している。この建物跡は桁行2間以上、梁行2間の総柱構造で、建物内部には堀の材木列は貫



第25図 第74次調査区出土遺物

通していない（註25）。柱部材も崩の材木部材を越える太さで、柱基底の埋設深度も材木列と同程度であった。また、南西コーナーに付設された櫓状建物も前述の西辺南櫓と同様の状況であった（註26）。今回発見した構造物はこれらの櫓状建物とは明らかに異なっていることから、少くとも西辺とは一律でなかったものと言える。しかし、外郭3等分割位置に同様構造の櫓状建物が付されてはいないまでも、何らかの構造物が付設されていたことは考えられよう。今後、他の3等分割地点での遺構確認調査を待って、存在の有無だけではなく、構造上の差異・種類等についてさらに検討をする。

また、外郭南辺材木列に関しては、布掘り幅、深さ、材木間隔等がこれまでの外郭南辺の調査で確認された規模・構造にほとんど合致するものであり、ほぼ一定の規格のもとに構築されていることが再確認できた。

なお、材木列布掘り埋土より出土した弥生土器片は、その文様から青木畠式期のものと考えられる。これまでの調査でも弥生土器片が数ヶ所で出土しており、天王山式期、舟形圓式期（註27）のものが確認されているが、今回の青木畠式期土器片の出土は、官衙造構面の下層に弥生時代初頭まで遡る文化層の存在が想起され、これらのこととも今後の調査成果を待って検討していきたい。

IX 総 括

今年度は昨年度にひき続きⅡ期官衙付属寺院の遺構確認に主眼を置き、方二町と推定される寺城の南西地区の調査の他、住宅建築等による発掘届が提出されていたⅡ期官衙域内の第35・61次調査隣接区、官衙域内中央西地区における小規模な事前調査を2件予定していた。

本年度は郡山遺跡緊急範囲確認調査第2次五ヶ年計画の第3年次にあたり、付属寺院に関する調査は今年度の成果をもって総括する計画となっていた。寺院中枢域内では広範囲な調査区を確保することが困難であり、中枢部隣接地区において、昨年度発見した中枢区画施設西辺の状況と隣接地区的遺構確認を目的とする調査が計画された。区画施設はほぼ推定地内で確認し、寺院中枢の範囲がさらに明確になった。また隣接地区には寺院と同期の竪穴住居跡が確認された。また、Ⅱ期官衙外郭南辺材木列を緊急調査し、外郭に付設された構造物を推定位置で確認した。さらに、年度途中に提出された住宅建築等に伴う発掘届により、2ヶ所で事前調査を実施した。

1. Ⅰ期官衙の調査

Ⅰ期官衙を構成する遺構は第68・71・72次調査において発見された。

第68次調査では第24・35・61次の一連の調査で判明した官衙内の雑舍院と考えられる一画の北側の遺構が確認された。この区画は材木駁や一本柱駁によって開まれた東西51~54m、南北65~66mの区画で、掘立柱建物と竪穴住居・竪穴建物などが内部に建ち並んでいることがわかつっていたが、今回の調査でもこれまでの成果と同様の遺構群が発見された。

第71次調査では第2・31次の調査でその一部が発見されていた建物の東端が見つかり、桁行8間、梁行3間になることが明らかになった。この建物は建物内部に柱のない官衙建物で、これまでこの一帯から北西部にかけての地区で発見されている総柱構造による倉庫建物とは異なる性格の建物と考えられよう。この官衙建物の前時期には2間×3間以上の総柱による倉庫建物が造られており、この北西部から広がってくる倉庫建物群の一角となって、倉庫院を形成していたことが明らかである。Ⅰ期官衙の遺構群はこれまでの調査により3小期程の変遷があることがわかつてあり、第71次調査区内でも遺構の重複関係から2時期にわたることが明らかである。重複する建物跡は前述のとおり、古いものが倉庫建物であり、新しいものが官衙建物である。倉庫建物群はこのS B14建物の北側までは広がっているものの、この南側はS B14等を主要建物とする官衙ブロックが展開するものと考えられていたが、Ⅰ期官衙のある段階まではこの地区まで倉庫建物が建ち並び、一帯が倉庫院として機能していたものが、何らかの理由により、用途変更が成され、官衙建物による官衙ブロックが形成されたものと考えられよう。

この官衙ブロックに関しては、遺構の存在が推定される南側一帯が未調査であり、建物数やその配置も明らかでないことから、今後の調査を待つての検討を要する。S B14建物は桁行総長16.5m（8間）で、本遺跡の調査の中ではⅠ期・Ⅱ期官衙を通じて最長の建物であり、国衙政庁の脇殿や都衙政庁をとり囲む長屋に類似性が求められることは指摘（註28）していた通りである。このことは官衙ブロックの機能・性格、ひいてはⅠ期官衙全体の性格を考えるうえで極めて重要な問題を内在している。

第72次調査はごく限られた面積の調査ではあったが、掘立柱建物跡や竪穴住居跡が発見され、Ⅰ期官衙の遺構群がさらに東に広がっていることが確認された。第71次調査区からの位置は東に約50mである。

第70次調査は広範囲な調査としてはこれまでの中で最も南に位置しているが、Ⅰ期官衙の遺構が全く発見されず、この地区まではⅠ期官衙が広がっていなかったことが想定されるが、南限を断定するにはさらに周辺地区的認調査を必要とする。

2. Ⅱ期官衙の調査

Ⅱ期官衙を構成する遺構は第68・69・74次調査において発見された。

第68次調査では、西側の第35次および、東側の第61次で発見されていた S A 386、S A 794とした一本柱列と一連の遺構と考えられる一本柱列の一部が発見された。この一本柱列は約72mにわたってのびており、さらに東西に続いている。柱間寸法もほぼ8尺等間で、第68次と第35次の間に約2m、第68次と第61次の間に約6mの未調査部分があるが、門等の付帯施設の遺構は検出されていない。また、この辺の北側には堀と同期と考えられる建物がいくつか見つかっているが（註29）、第68次調査区内では同期の遺構は発見されず、第35次で西側部分のみ見つかっていた S B 434、435 A・B 建物跡は、本調査区では発見されず、桁行が3間以上にのびないことが明らかである。この一本柱列は真東西方向に続いており、外郭南辺材木列から北にほぼ3町の線に位置していることは既述（註30）した通りである。

第69次調査では、官衙外郭東辺の材木列を確認した。今回は調査面積の制約から、外郭大溝まで明らかにすることできなかったが、材木列は推定位置で、これまでと同様の規模・構造であることを確認した。調査地は旧状が畠地であったことから、材は遺存しておらず、材の痕跡のみ検出した。布掘りが一部2.8m程にわたって幅が40cm以上広がっており、若干の変化がみられるが、これが上部構造の変化に起因するものが否か、あるいは堀の付設構造物の掘り方が、今次調査では明らかにすることできなかった。今回の調査により、外郭東辺材木列は南東コーナーより北に167mまで確認したが、東辺における門や櫓状建物等の付帯施設については不明であり、今後の調査による。



第25図 II期官施・流亭全体図

第74次調査では、官衙外郭南辺の材木列を確認した。材木列は推定線上で、これまでの調査で確認された規模・構造と殆どかわりない状況で検出された。ただ、布掘りの状況に若干の変化がみられた。これまで材木列を検出した個所は第4次Aトレンチ（註31）を除いては上部削平擾乱のため上半部は不明な部分が多く、今次調査区は比較的擾乱が軽微で、遺構の遺存状態は良好であったことから、布掘りが南側では二段掘りを行っていることが観察された。段掘りの状況は前述の第4次Aトレンチで顕著にみられ、ここでは南北両側とも段をつけて掘り込んでいたことがわかつており、上部構造に違いはないものと考えられるが、地点により作業上の差異が若干あったことも考えられる。材木は比較的遺存状況が良好で、各部材のやや細かな観察検討が可能であった。検出した16.8m、57本についてみると芯持ち材18本に対し、割材38本と削材の比率が高い。また、角材とみられる材もあるが、腐朽のため断定できないものの殆どは丸材である。芯材と削材、角材らしき材と丸材との配列関係に規格性は認められなかった。

外郭材木列上の3等分割点における付設構造物の有無については、材木列に取り付くかと考えられる構造物の柱穴を検出したが、上部構造等不明な点が多く、付帯構造物であることは確認できるものの、櫓状建物等と断定し得なかった。柱位置は材木列の片側（郭内側）に3本一列となっており、これに対応する材木列上での柱位置で材木部材に特に変化は見い出せないことから、材木列をぬきにして構造物は考え難いが、材木列と同期に終始一貫して存在していたことも実証できない。以上のようにこれまで発見した櫓状建物とは構造・規模等において明らかに差異がみられる。便宜上建物跡としているが、屋根等が葺かれない台状の付設構造物など想定されるが、類例がなく、今後さらに検討を要する。しかし、この構造物の中央柱位置が南東コーナー位置から丁度142mで、3等分割点にあたっていることから、一律に櫓状建物が配置されていないことは確認されたが、他の構造物をも含めて、各辺の3・4・6などの等分割位置における調査を行い検討する必要があろう。

3. II期官衙付属寺院（郡山廃寺）の調査

廃寺に関する遺構確認調査は第70次調査において行なわれた。

寺域は方2町と推定されているが、61年度までの調査により、推定寺域内ほぼ中央部から講堂と考えられる基壇や僧房と考えられる掘立柱建物跡が発見され、さらにそれら中枢御藍を取り囲むとみられる材木塀が発見され、中枢御藍の範囲は東西81m、南北132mと推定された（註32）。

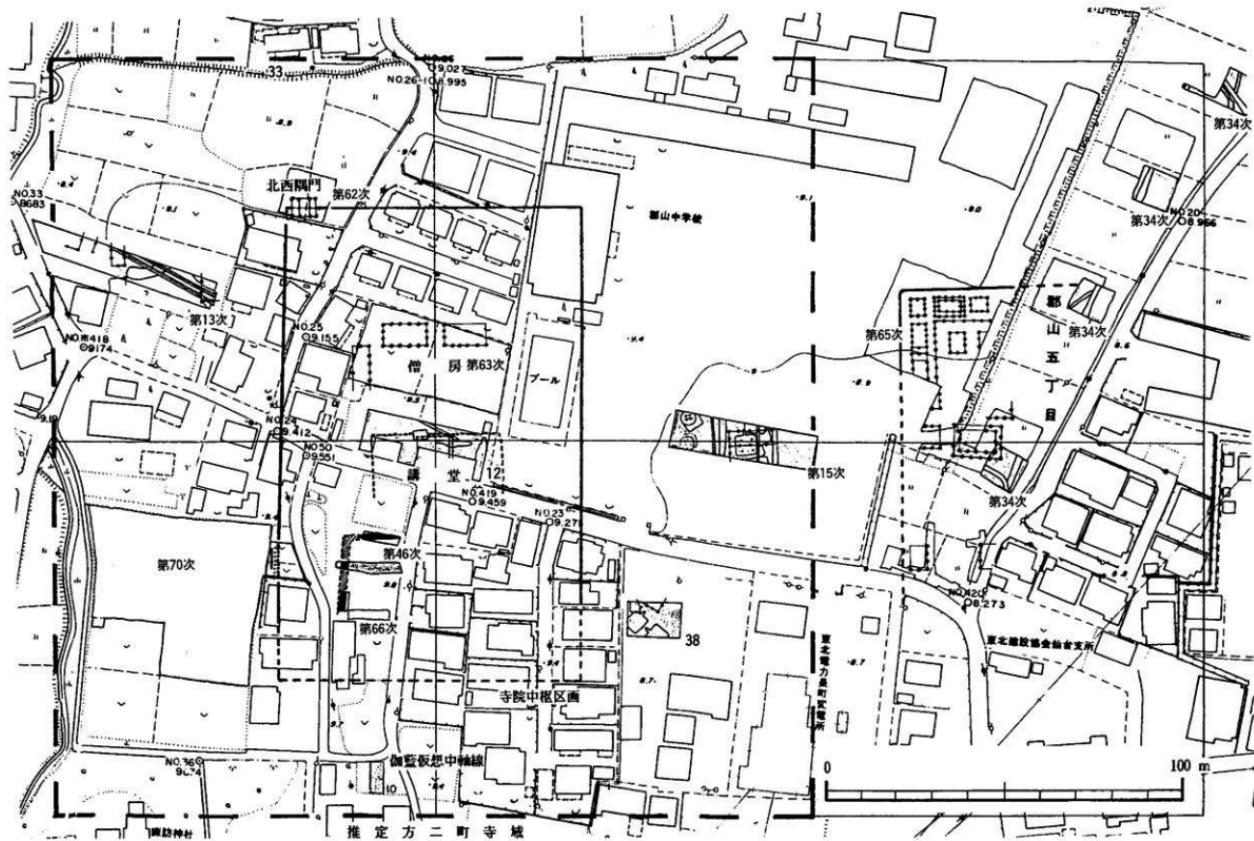
この中枢部を区画する材木塀は北西コーナー部分が明らかになっていたが、今年度の調査により、西辺は北西コーナーより南に104mまで確認された。極めて限られた部分での調査であ

ったことから西辺全体の様相は知り得ないが、方向がN-4°-Eとやや東にふれ、寺院全体の基準方向と考えられる真北方向と一致していない。単に西辺だけのずれなのか、中枢伽藍の構造物全体に及ぶものか断定できず、今後の調査による検討を要する。伽藍の範囲はこれで北辺と西辺がほぼ確定し、推定範囲はこれまで通り東西81m、南北132mを見ておきたいが、若干の基準方向の違いにより、長さ幅とも細かな数値の変動もあり得る。また、東辺・南辺は全く未調査であり、現段階では推定の域を脱し得ない。材木塀の構造は北西コーナー部分での状況と基本的には同様と考えられるが、西辺においては材木塀西側（外側）に並行する一本柱列と溝跡が発見され、何らかの関連遺構と考えられるが、先後関係も同時性も検証できなかった。この辯については全体の規格・範囲はもとより、辯の構造についても今後の調査でさらに検討を要する。

今回の遺構確認調査対象地区は前述した伽藍中枢区画の材木塀の西側（外側）にあたり、寺院の主要遺構群は発見されず、数軒の竪穴住居跡がややまとまって発見されたにとどまった。これらの竪穴住居跡も全てが寺院と同時期のものか明らかでないが、遺物の出土した住居跡については寺院期のものとみられ、またそれ以外についても方向性などからみて、同期と考えられるものもある。しかし、全てが同時存在し得ないことは重複・配置関係から明らかである。竪穴住居跡は構造的には一般集落にみられるものと殆ど差異は認められないが、立地的にみれば、推定寺域内であり、伽藍中枢に極めて近く、辯に隣接している。寺院と同期にこれに近接して集落が営まれたとは考え難く、寺院に居住した人々の居住区と考え、広義の寺院関連施設とみておきたい。しかし、これらの住居群あるいはこれに居住した人々が寺院の中にあってどの様な役割を担っていたものか、今回の調査では明らかにできなかった。

廃寺については今年度までの調査で、中枢伽藍の一部、中枢区画施設の一部が明らかになってきたが、方二町と推定した寺地全城の区画施設、中枢伽藍の建物とその配置、規模等々、未解明な部分が多く残されており、今後さらに調査検討を進めていく必要があろう。

本概報中に収めた国庫補助金による発掘調査と並行して実施してきた、廃寺域外東部地区における学校建設のため事前調査（第65次）で、溝に囲まれた掘立柱建物群が発見された。現在整理作業中であり、詳しくは後段の報告に委ねたいが、発見された地区は推定方二町寺城の真東にあたり、遺構群の方向は第4段階とされるⅡ期官衙・廃寺と同じ真北を基準とし、遺構群の年代もこれと矛盾しない。小規模ながら四面廂付建物を含めて建物が柱筋を揃えるなどして建ち並んでおり、官衙・寺院に密接に隣接する施設と考えられる（註33）。これらの成果をも含めて、遺構全体の諸施設の在り方を検討する必要があろう。



第27図 藩寺 全 体 図

註・参考文献

度々、引用される郡山遺跡調査概報については次のとおりである。

| | |
|------|--------------------------------------|
| 郡山報1 | 仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」『郡山遺跡発掘調査概報』1980 |
| 郡山Ⅰ | ◆ ◆ 第29集「郡山遺跡Ⅰ」1981 |
| 郡山Ⅱ | ◆ ◆ 第38集「郡山遺跡Ⅱ」1982 |
| 郡山報2 | ◆ ◆ 第42集「郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急調査」1982 |
| 郡山Ⅲ | ◆ ◆ 第46集「郡山遺跡Ⅲ」1983 |
| 郡山Ⅳ | ◆ ◆ 第64集「郡山遺跡Ⅳ」1984 |
| 郡山Ⅴ | ◆ ◆ 第74集「郡山遺跡Ⅴ」1985 |
| 郡山Ⅵ | ◆ ◆ 第86集「郡山遺跡Ⅵ」1986 |
| 郡山Ⅶ | ◆ ◆ 第96集「郡山遺跡Ⅶ」1987 |

註1 「郡山Ⅶ」第Ⅷ章1 (P.77)

註2 「郡山Ⅵ」第Ⅸ章4 (P.62)

註3 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 1957

註4 仙台市文化財調査報告書第43集「栗遺跡」IV章4(3) (P. 173~174) 1982

註5 「有蓋高杯の編年的位置と年代観については、中村浩氏によれば陶邑窯第Ⅲ型式第1段階の中で「この段階からは有蓋高杯の存在が確認されなくなっている。」と、この器種が第Ⅱ型式で終末を迎えていることが述べられている。第Ⅱ・Ⅲ型式の年代観はⅡ型式最終の6段階からⅢ型式の大半（1～3段階）をほぼ7世紀代に相当するとしている。

中村 浩「和泉陶邑窯の研究」第Ⅱ部第1章 (P. 194) 1981

◆ 「古代窯業史の研究」第Ⅲ部第1章三・四 (P. 151~155) 1985

また、中村氏は同書後者の中で、大和・飛鳥地方の寺院・宮跡からの出土遺物における年代検討から、第Ⅱ型式4段階が6世紀後半～末、5～6段階が7世紀前～中半、Ⅲ型式1段階が先の6段階と一部重なる形で7世紀中半頃、Ⅲ型式3段階が7世紀末頃と各々想定している。Ⅱ型式とⅢ型式の境界が必ずしも明確でなく、7世紀の初めから中葉頃と幅がある。同書第Ⅲ部第2章三 (P. 166~176)

註6 註1と同。

註7 「郡山Ⅲ」第Ⅹ章 (P. 67~72)

註8 註3と同。

註9 仙台市文化財調査報告書第60集「南小泉遺跡」第12回～6 (P. 24)

註10 宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書」「岩切鴻ノ巣遺跡」第Ⅷ章[1] 2, (P. 183~246) 宮城県教育委員会 1974

註11 仙台市文化財調査報告書第68集「南小泉遺跡」第V章(1) (P. 88~97) 1984

註12 「郡山Ⅶ」第V章 (P. 24~33)

註13 「郡山Ⅶ」第V章4 (P. 30~33)、第Ⅸ章4(1) (P. 79~82)

註14 外郭南辺西端付近の大溝1層から一括して出土している。殆どは堆積土1層であるが2・3層（最下層）からも若干出土している。上下層で接合関係の土器もあり、各層に殆ど時間差は認め難い。Ⅱ期官衙の終

末に位置づけられる一括土器群と考えられる。

第7次調査「郡山Ⅰ」第Ⅳ章（P.18～29）

第43次調査「郡山Ⅴ」第Ⅲ章（P. 7～14）

註15 註3と同

氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』 1967

註16 註14と同。第43次調査「郡山Ⅴ」第Ⅲ章（P. 7～14） S D35外郭大溝1層出土の土師器C--486 塚
(P.12第6図1 観察表の出土遺構がS D33はS D35の誤り)

註17 「郡山報1」第3図4 (P. 7～20)

註18 「郡山Ⅲ」第Ⅳ章 (P.61～66) IV層出土の土師器C—201 盖 (P.40第40図5)

註19 仙台市文化財調査報告書第3集「善應寺横穴古墳群調査報告書」(図版18-3、32-13) 1968

註20 註5と同者。

註21 「郡山Ⅳ」第V章 (P.24～33)

註22 註1と同。

註23 「郡山Ⅳ」第Ⅳ章 (P.65～68)

註24 「郡山Ⅱ」第Ⅳ章 (P.50～55)

註25 註24と同。S B 134 建物跡

註26 「郡山Ⅰ」第Ⅳ章の第7次調査におけるS B51建物跡 (P.21・22)

註27 「郡山報2」第Ⅲ章3 (P.17～19) の弥生土器B—2・5

「郡山Ⅴ」第Ⅳ章3 (P.37～46)

註28 「郡山Ⅴ」第Ⅳ章2 (P.85)

註29 「郡山Ⅳ」第Ⅲ章 (P. 7～56) のS B 434、435 A・B 建物跡

「郡山Ⅳ」第Ⅳ章 (P. 9～23) のS B 793 建物跡

註30 「郡山Ⅳ」第Ⅲ章4 [第4段階] のS A 386 一本柱列 (P.54・55)

「郡山Ⅳ」第Ⅳ章4 [第4段階] のS A 794 一本柱列 (P.23)

註31 「郡山Ⅰ」第Ⅳ章の第4次調査A区におけるS A33材木列 (P.19・20)

註32 「郡山Ⅳ」第Ⅴ章4 (P.30～33)、第Ⅳ章4 (P.79～82)

註33 「郡山遺跡第65次調査現地説明会資料」1987. 5 仙台市教育委員会

「第14回古代城柵宮跡遺跡検討会資料—郡山遺跡—」 1988. 2

X 調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

| 月 日 | 行 事 名 称 | 担当職員 | 主 催 |
|----------|----------------------|-----------|------------|
| 5. 22 | 第65次調査報道発表 | | |
| 5. 24 | 第65次調査現地説明会 | 長島・及川・千葉他 | |
| 9. | 講座「郡山遺跡の調査」 | 木 村 | 東長町小学校社会学級 |
| 10. 14 | 遺跡発掘体験学習・東長町小学校 | 松本他 | |
| 12. 4 | 遺跡見学会 | 木 村 | 東長町小学校社会学級 |
| 2. 20・21 | 第14回古代城柵官衙検討会 | 長 島 | |
| | 仙台市博物館「常設展 原始・古代・中世」 | | |
| | 八本松市民センター「郡山遺跡資料展示」 | | |
| | 東北歴史資料館「東北の兵たち」展示 | | |
| | 福島県立博物館「陸奥の古瓦」展示 | | |

2. 調査指導委員会の開催

第70次調査現地指導 10月 9・23日

第16回 郡山遺跡調査指導委員会 3月 8日

○昭和62年度の事業報告について

○昭和63年度の調査計画について

写 真 図 版



図版1 郡山遺跡航空写真



図版2 第68次調査区全景
(東より)



図版3 第68次調査区
S I 1019
竪穴住居跡
(東より)

図版 4 第68次調査区
S I 1018
竪穴住居跡
(南より)



図版 5 第68次調査区
S I 1022
竪穴住居跡
(南より)



図版 6 第68次調査区
S I 1026
竪穴住居跡
S B 建物跡
(南より)





図版7 第69次調査区
造構検出状況
(北より)



図版8 第69次調査区
S A 1026
材木列
(北より)

図版9 第69次調査区
全景（南より）



図版10 第70次調査区
全景（西より）



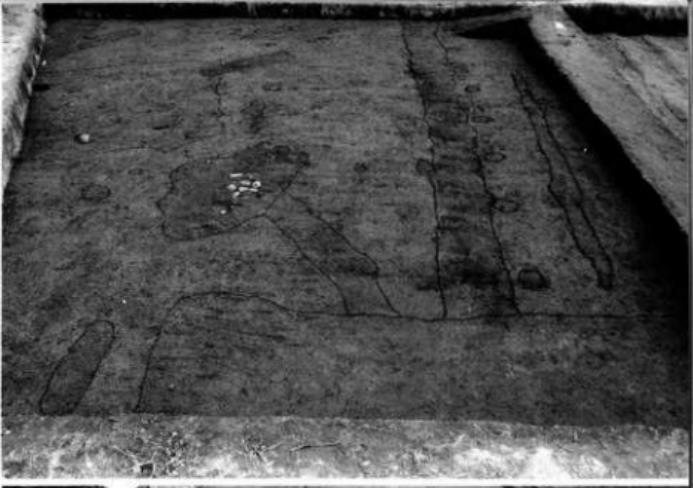


図版11 第74次調査区
航空写真



図版12 第70次調査区
A区全景
(北より)

図版13 第70次調査区
A区
遺構検出状況
(北より)



図版14 第70次調査区
B区全景
(西より)



図版15 第70次調査区
C区全景
(西より)





図版16 第70次調査区
D区全景
(西より)



図版17 第70次調査区
E区全景
(東より)



図版18 第70次調査区
F区全景
(東より)

図版19 第70次調査区
S A 1066材木列
S A 1055一本柱列
(南より)



図版20
第70次調査区
S A 1066材木列
S A 1055一本柱
(北より)



図版21 第70次調査区
S A 1066材木列
S A 1055一本柱列
(西より)



図版22 第70次調査区
S A 1066材木列
土層断面
(北より)

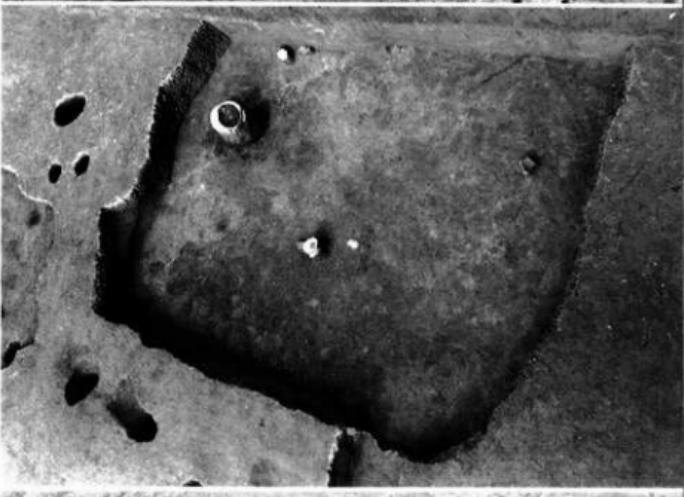


図版23 第70次調査区
S A 1066材木列
土層断面
(南より)

図版24 第70次調査区
S B 1042
建物跡
(西より)



図版25 第70次調査区
S I 1061
竪穴住居跡
(西より)

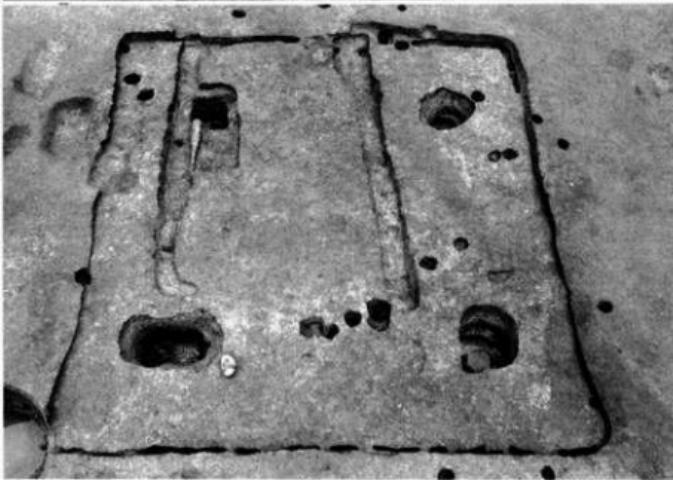


図版26 第70次調査区
S I 1028
竪穴住居跡
(南より)





図版27 第70次調査区
S I 1031
竪穴住居跡
(南より)



図版28 第70次調査区
S I 1034
竪穴住居跡
(南より)



図版29 第70次調査区
北東柱穴
(南より)

図版30 第70次調査区
南西柱穴
(南より)



図版31 第70次調査区
南東柱穴
(南より)



図版32 第70次調査区
S I 1034
豎穴住居跡
北条柱穴
(南より)





図版33
第70次調査区
S I 1033
竪穴住居跡
(南より)



図版34
第70次調査区
S I 1033
竪穴住居跡
掘り方
(南より)



図版35 第70次調査区
S I 1036
竪穴住居跡
(東より)

図版36 第70次調査区
S D 1041
溝跡
(南より)



図版37 第70次調査区
S I 1041溝跡
(北より)





図版38 第70次調査区
土器出土状況
(西より)



図版39 第70次調査区
S D 1074
溝跡土層断面
(南より)



図版40 第70次調査区
S K 1075土坑
集石状況 (北より)

図版41 第70次調査区
SK 1075土坑
集石状況
(南より)



図版42 第70次調査区
SK 1075土坑
集石状況
(南より)



図版43 第70次調査区
完擺状況
(南より)





図版44 第70次調査区
S E 1032
井戸跡土層断面
(南より)

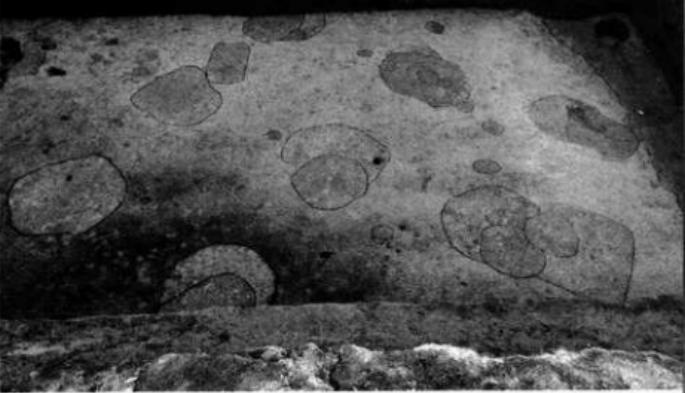


図版45 第70次調査区
S E 1032
井戸跡土層断面
(南より)



図版46 第70地調査区
S K 1039土坑
炭化物出土状況
(西より)

図版47 第71次調査区
遺構検出状況
(西より)



図版48 第71次調査区
全景
(西より)



図版49 第71次調査区
南壁土層断面
(北より)



図版50 第71次調査区
東壁土層断面
(西より)





図版51 第71次調査区
S D19溝跡
(東より)



図版52 第72次調査区
全景
(西より)



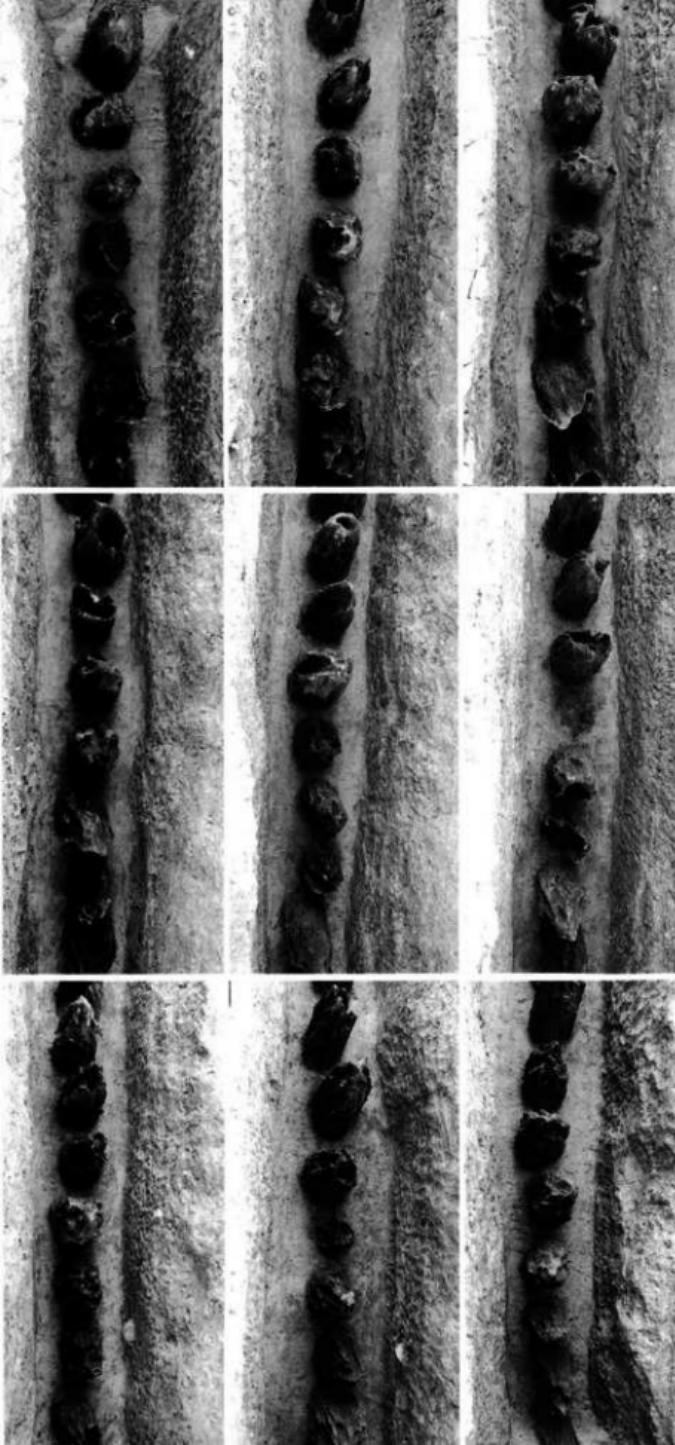
図版53 第72次調査区
S I 1071
竪穴住居跡
(北より)



図版54 第74次調査区
全景
(西より)



図版55 第74次調査区
S A 33材木列
(西より)

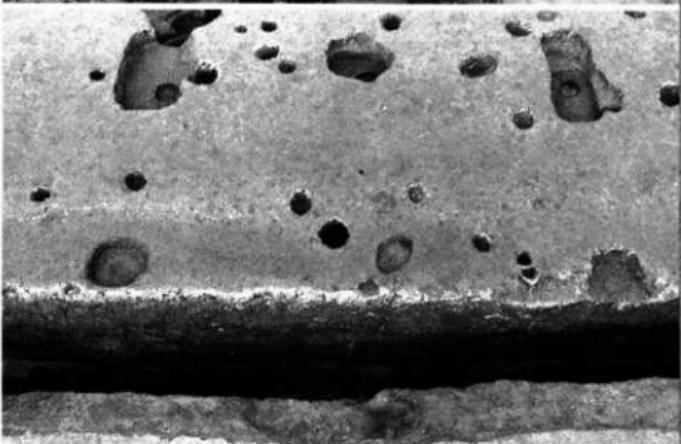


図版56
第73次調査区
S A 33材木列

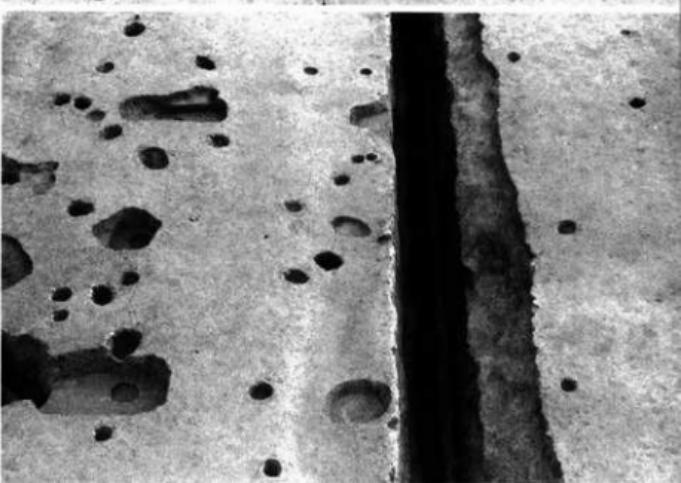
図版57 第74次調査区
土層断面
(西より)

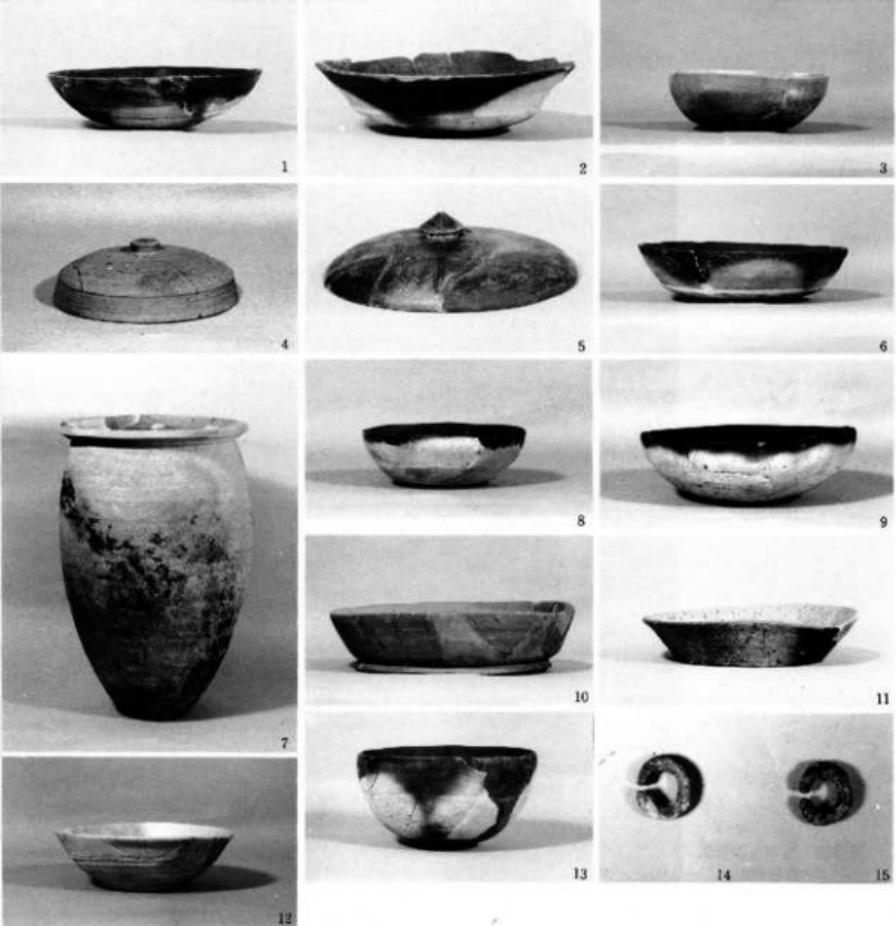


図版58 第74次調査区
S B 1081
構造物
(南より)



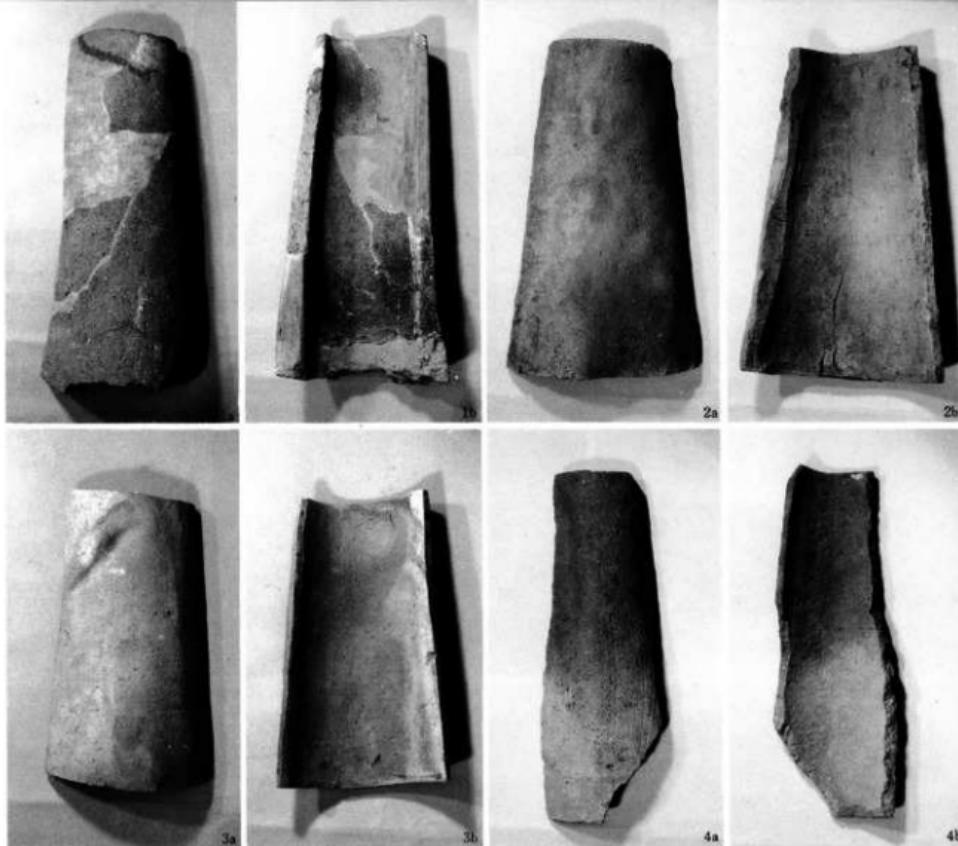
図版59 第74次調査区
S B 1081
構造物
(西より)





1. C-627 坯 68次 耕作土
2. C-630 坯 68次 S I 1018
3. C-628 坯 68次 耕作土
4. E-291 莖 68次 S I 1018突出面
5. C-632 莖 70次 S I 1033床面
6. C-635 坯 70次 S A 1066
7. D-18 莖 70次 S I 1061カマド
8. C-634 坯 70次 S I 1034溝
9. C-633 坯 70次 S I 1019埋土
10. E-289 坯 70次 S I 1031埋土
11. E-292 坯 70次 耕作土
12. D-17 坯 70次 S I 1061床面
13. C-631 坯 70次 S I 1031床面
14. N-42 耳環 70次 S K 1054耕土
15. N-43 耳環 70次 S K 1054埋土

圖版60 第68次・70次 調査区出土遺物



1. F-72 红瓦 70次 耕作土
 2. F-74 丸瓦 70次 S I 1031床面
 3. F-75 丸瓦 70次 S I 1031床面
 4. F-75 丸瓦 70次 S I 1033床面



1a



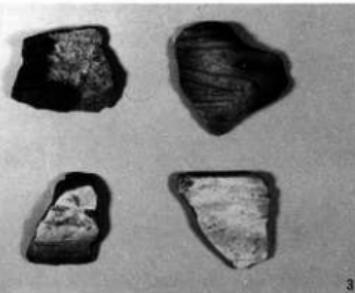
1b



2a



2b



3



4

1. G-61 平瓦 SH1034 床面
2. C-636 壁 SD1041
3. 弓生土器 SA33 埋土
4. K-20 石鍬 SA33 埋土

図版62 第70次・74次 調査区出土遺物

職 員 錄

| 文化財課 | | 調査係 | 調査係 |
|-------|------|---------|--------------|
| 課長 | 早坂春一 | 係長 佐藤 隆 | 上事 斎野裕彦 |
| 管 理 係 | | 主事 結城慎一 | ・ 佐藤良文 |
| 係長 | 成田時雄 | 教諭 太田昭夫 | ・ 長島榮一 |
| 主任 | 岩澤克輔 | 上事 篠原信彦 | 教諭 千葉 仁 |
| 主 事 | 白幡靖子 | ・ 木村浩二 | ・ 松本清一 |
| ・ | 山口 宏 | ・ 佐藤 洋 | 主事 及川 格 |
| | | ・ 金森安孝 | ・ 中富 洋 |
| | | ・ 佐藤甲一 | ・ 平間亮輔 |
| | | 教諭 小川淳一 | 教諭 渡辺雄二 |
| | | 上事 吉岡恭平 | 主事 宮崎 明 |
| | | ・ 渡部弘美 | ・ 佐藤 淳 |
| | | ・ 工藤哲司 | ・ 松本素明 |
| | | 教諭 橋本光一 | ・ 渡部 紀 |
| | | 主事 上浜光朗 | ・ 大江美智代 |
| | | | ・ (併任) 工藤信一郎 |

「郡山遺跡」発掘調査報告書刊行目録

- 第23集 年 報1－昭和54年度発掘調査略報－(昭和55年3月)
- 第29集 郡山遺跡I－昭和55年度発掘調査概報－(昭和56年3月)
- 第38集 郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査概報－(昭和57年3月)
- 第42集 郡山遺跡I－宅地造成に伴う緊急調査－(昭和57年3月)
- 第46集 郡山遺跡III－昭和57年度発掘調査概報－(昭和58年3月)
- 第64集 郡山遺跡IV－昭和58年度発掘調査概報－(昭和59年3月)
- 第74集 郡山遺跡V－昭和59年度発掘調査概報－(昭和60年3月)
- 第86集 郡山遺跡VI－昭和60年度発掘調査概報－(昭和61年3月)
- 第96集 郡山遺跡VII－昭和61年度発掘調査概報－(昭和62年3月)
- 第110集 郡山遺跡VIII－昭和62年度発掘調査概報－(昭和63年3月)

仙台市文化財調査報告書第110集

昭和62年度

郡山遺跡Ⅷ

—昭和62年度発掘調査概報—

昭和63年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市西分町3-7-1

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 263-1166

